

第40回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構

第40回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国（海外を含む）の中学生から14,151編（学校数314校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文41編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々にも深く感謝申し上げます。

平成30年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

最優秀賞 (一編)

〈内閣総理大臣賞〉 時をこえて〜未来へ〜

宮城県 宮城県仙台二華中学校 三年 井崎 英里 1

優秀賞 (八編)

〈厚生労働大臣賞〉 水道水が手元に届くまで

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 一年 真野 聡真 2

〈農林水産大臣賞〉 水の恩恵

鹿児島県 学校法人津曲学園 鹿児島修学館中学校 二年 松久保 幸来 3

〈経済産業大臣賞〉 めぐる一筋の水

愛媛県 今治市立近見中学校 二年 森 温大 4

〈国土交通大臣賞〉 源流の里から未来をつくる

山梨県 小菅村立小菅中学校 一年 古谷 梨那 5

〈環境大臣賞〉 室根の里から海をおもう

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 三年 菅原 菜央 6

〈全日本中学校長会会長賞〉 豊川の清掃活動から水について考える

愛知県 豊橋市立章南中学校 三年 渡辺 風花 7

〈水の週間実行委員会会長賞〉 今も昔も

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 三年 和田 菜花 8

〈独立行政法人水資源機構理事長賞〉 「ありふれた水に思う―二つの感謝―」

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 二年 宇野 由里子 9

入選 (三十二編)

福島県 福島県立会津学鳳中学校 一年 今村 真生 10

福島県 矢吹町立矢吹中学校 三年 二瓶 紗英 11

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 廣瀬 十和子 12

栃木県 矢板市立矢板中学校 二年 箱田 緋優璃 13

栃木県 矢板市立矢板中学校 二年 川崎 桃枝 14

埼玉県 秩父市立尾田蒔中学校 三年 大澤 百恵 15

埼玉県 浦和ルーテル学院中学校 三年 砂川 友美子 16

東京都 新宿区立新宿西戸山中学校 二年 原 奈々佳 17

神奈川県 洗足学園中学校 二年 佐藤 美鈴 18

神奈川県 聖ヨゼフ学園中学校 三年 本多 みなみ 19

山梨県 北杜市立甲陵中学校 三年 池田 桜 20

山梨県 北杜市立甲陵中学校 三年 池田 歩夢 21

山梨県 小菅村立小菅中学校 二年 廣瀬 結 22

静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 寺門 鈴音 23

三重県 高田中学校 一年 杉山 なつみ 24

三重県 高田中学校 二年 前田 あずみ 25

資料

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

第四十回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

目次

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

時をこえて　　未来へ

宮城県 宮城県仙台二華中学校 三年 井崎 英里

雪どけを迎えた春、私は「ダムより高い鯉のぼり」の記事を新聞で見つけ、釜房ダムを訪ねました。目の前に広がる森と湖。優雅に泳ぐ鯉のぼり。そんな美しい春の景色を、一枚の風景画として残したいと思っただけです。

釜房ダムとは、私の住む仙台市より西の、宮城県のほぼ中央を流れる名取川の支川、碓石川上流の川崎町という小さな町に作られた特定多目的ダムです。上流の太郎川、北川、前川より集められた水は、ダムによる釜房湖となり、私が訪ねた日も、湖いっぱい満たされた水一面が、遙か遠くは瑠璃色に、時々太陽の光を浴びて金色に輝いて見えました。ダムを囲むように連なる山々の緑、春を知らせる満開の桜の淡い紅色、ダムのゲートから流れ出るしろかね色の水、そんな風景画のような世界の大空を、大きな鯉のぼりがのびのびと泳いでいました。これが私の国、日本の水の源であり、この地球が「水の惑星」と呼ばれる由縁なのでしょう。

世界には、水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。水の惑星と呼ばれる地球であっても、利用可能な淡水の割合は極わずかで、ほとんどが海水、私たち人間をはじめ、あらゆる生物が生きるために使える水ではないのです。

この三月に訪ねたシンガポールもまた、水問題を抱えた国の一つでした。赤道直下に位置し、年中気温と湿度が高く、降水量も多い国であるのに、狭い国土には大きな河川も雨水を貯める土地もありません。さらには国土自体の保水力も乏しいことから、飲み水のほとんどを隣国からの輸入に頼っていると聞きました。飲み水が手に入らないわけではないのですが、滞在初日に、蜜柑色をした三〇ミリリットルのボトルを渡され、滞在期間中は、毎朝このボトルに水を入れて持たされることとなりました。水を贅沢に使う観光が有名な都市の、現実の水問題に私は

強い衝撃を受け、いつも以上に水を大切にいただくように心がけました。シンガポールの水事情を思い出しながら、私は自分の国である日本のことを考えました。日本には四季があり、梅雨や秋雨の影響で、一年の降水量に大きな変化はあるものの、世界的に見れば、恵まれた水環境のはずです。自宅にも学校にも、街のいたる所に水道が引かれ、その蛇口をひねれば、水やお湯がすぐに流れ出ます。そのため、私たち日本人は、いくらでもあるものだとえに「湯水の如く」と使うのです。果たして水は、本当にいくらでもあるものなのでしょうか。

私の忘れかけていた記憶、忘れようとしている記憶「東日本大震災」。小学校一年生も終わろうとしている春のあの日まで私は、水のない生活をしたことも、考えたこともありませんでした。蛇口から水の出ない日々、やっと水を手に来た時の喜びを、私は忘れられません。空から容赦なく降る雪も、沿岸の町を襲った津波もまた、水の別な姿であることが恨めしく、未来の見えない不安に誰もが涙を流した日々。時間という魔法が、少しずつ人々の心を癒やしてくれてはいるものの、何かを皮切りとし、水の隠された本性、恐ろしい姿を度々思い出すのです。

あの日から、水に対する私たちの見解は確実に変わりました。水を大切にすると同時に、いつの日か再び変貌する水の姿に警戒し、備えるための訓練が続いています。

釜房湖の美しい水を眺めながら、ふと、かつてのこの湖の下に存在した豊かな耕地の広がる小さな町のことを考えました。そこに暮らしていた人々の思いと、今、目の前に広がる美しい湖とダムが、現在の私たちに不自由なく水を提供しているという現実をです。

残すべき水の歴史は、震災だけではありませんでした。今日見たこの美しい風景を、私は過去と共に未来へ描き残したいと思います。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

水道水が手元に届くまで

僕は、水が大好きです。喉がかわいた時は、さっとコップを手にとり、水道水を口にします。蛇口をひねれば水が出る。そんな当たり前に思える生活を送っていました。

ある日、その水について疑問がうかびました。
「この水、どこからどうやってきているのだろうか？」

と思った僕は、自分の地域に水が届くまでを調べ、施設の見学をしに岐阜県八百津町の丸山ダムと愛知県犬山浄水場を訪れました。

丸山ダムは、直接愛知用水とは関わりを持ちませんが、木曽川の下流域を守る大事な役割を担っています。まず僕は、管理所の方に連れられ、慰霊碑を訪れました。百メートル級であるダム建設に、犠牲者が出ていたようです。安心して人々が生活できる様に、安心して僕達の手元に水が届く様にするために、大切な命を落としている人がいることを知り、胸が痛くなりました。僕は、慰霊碑に手を合わせました。

又、丸山ダムや下流域に建築が計画されている新丸山ダムの建築により、やむを得ず、立ち退きをしなければいけない人達がいることも知りました。多くの人々の生活のために、故郷を離れた人達の思いを考えると、複雑な胸中でした。僕のおじいちゃんも、八百津の山を、ダム建築のために売っていました。

「山を売ってしまったのはもったいなかったな」と話していました。

そんな人達の思いを一切無駄にはせず、日々ダムは、多くの人々のためにフル稼働しています。見学時も、ゲートが一門放流され、管理所では様々な機械で、様々な事を加味しながら、操作が行われていました。

そして、たくさんの方の思いが詰まった水は、木曽川を下り、同町の兼山取水口により愛知用水へと入ってきます。水道水として生まれ変わるため、浄水場できれいな水にします。今回は、犬山浄水場を見学させ

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 一年 真野 聡真

ていただきました。場内には、巨大な沈でん池やろ過池、浄水池などとにかくでっかい設備がたくさんあります。それもそのはず、一日で約三十四万四千三百立方メートルの水を給水できるのです。管理所では、場内の様子を一目で見ることができるようです。無数の機械であらゆる設備を操っています。

そんな浄水場では水質管理を欠かしていません。設備ごとに細かくチェックをしています。検査員の方々が、美味しく安全な水を届けるべく、日々たくさんの方々のために丁寧に管理をしています。しっかりと薬品で消毒をした水は、市町の配水池へと送られ、そこから各家庭へ供給されます。

日本の様に水道水を安心して飲める国は世界でもごくわずかです。実際に海外に行くと、飲食店に入っても、水が出てくるなんてまずありません。日本では当たり前でも、他の国にとってはもったいない話です。時々、水道水を飲むことに抵抗を覚える人を目にします。日本の水道水は世界一美味しい水道水と言っても、決して過言ではありません。ですが、その水が蛇口をひねって出てくるには、たくさんの方々の努力があったり、人生を変えた人もいるということを、決して忘れてはいけません。上流から下流。浄水場から手元へ届くまで、両手両足の指があっても足りない位の方々の思いが乗せられています。水道水が美味しい秘密は、これなのではないかと僕は思います。又、日常生活でもこれを心の片隅に残しておくだけで、水への印象が変わり、節水などへ繋がるのではないのでしょうか。水も限りある資源です。一人一人が水に対する意識を変え、誰もが暮らしやすい社会を作っていきたいと思いました。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水の恩恵

鹿児島県

学校法人津曲学園鹿児島修学館中学校

二年

松久保

幸来

梅干し、明太子、納豆、キムチ、アツアツのおみそ汁・・・どれも炊きたての白いご飯にピッタリだ。

私は白いご飯が大好きだ。夏が終わり、新米の出回る季節になると、私のテンションは一気に上がる。炊飯器をパカッと開けた瞬間に香る新米の香り。湯気の向こうに見える一粒一粒のお米がツヤツヤと光り輝く。こうして新米の炊き上がった様子を思い浮かべるだけでもヨダレが出そうになる。

そんな白米好きの私にとって、五月二日の伊佐市、湧水町の「川内川から取水する水田六百二十ヘクタールの水稲栽培を中止する」という決定はショックだった。

今年の秋には伊佐の新米の収穫量が減り、なかなか口にするのができなくなるかもしれないのだ。

湧水町や伊佐市の川内川では、霧島連山えびの高原・硫黄山の噴火以降、魚の死がい的大量に見つかっているという。えびの市の長江川では、同じく噴火以降、環境基準をこえるヒ素などが検出されている。その影響を受けて、今回の水稲栽培の中止は決まった。

私の知っている川内川は、さつま町宮之城を流れる、祖父が小さい頃（約七十年前）に夏の間毎日水遊びをしていたという川だ。

宮崎県の硫黄山の噴火が、鹿児島県の川内川に影響を及ぼすなんて、とても不思議に思い、地図を使って川内川を上流に向かってたどってみた。すると、川内川は宮之城よりも北にある鶴田ダム、曾木の滝、伊佐市を通って湧水町、宮崎県のえびの市、そして熊本県の球磨郡あさぎり町の白髪岳が始まりであるということが分かった。さらに詳しく調べてみると、川内川は、流路延長約百三十七キロメートル、流域面積は約千六百平方キロメートルもあるとのこと。

百三十七キロメートル。なんて長い距離を水は旅をしているのだろう。

百三十七キロメートルの間に、川の流域に暮らす人々の飲料水などの生活用水、稲作などのための農業用水、製紙業などに使われる工業用水、その他水力発電などに使われ、たくさん恵みを私たちにもたらしてくれている。

蛇口をひねれば水が出てくるのは当たり前。朝起きて水で顔を洗い、水を使って作られた食事を食べ、汗をかいたらシャワーを浴び、のどが渴いたら水を飲む。普段から私の生活の中で水は生きるために欠かせない大事なものはあるが、水が生活の中に存在することが当然のことになりすぎて、水の役目について改めて考える機会はなかった。しかし、思った以上に水は私の生活に密着しているようだ。私の大好きな白米のために、農業用水として美しく、きれいな水がなければならぬ。この作文用紙を作るときにも、製紙工場でたくさん水を使っているのだ、ということに改めて気付かされた。私が直接手を触れたり、目にすることがない色々な場所で、水は大活躍している。

今回の川内川水系の白濁が、少しでも早く元の状態に戻り、安心して農業用水として使える日が来ることを願うと同時に、水が私達の暮らすこの地球上に存在し、私達の生命を支えてくれていることに心から「ありがとうございます。」と感謝の気持ちを伝えたい。そして、このきれいな水がいつまでも地球上の全ての生き物にうるおいを与え続けていけるように、水をきれいに使える人間でありたいと、私は強く思っている。

経済産業大臣賞（優秀賞）

めぐる一筋の水

一筋の水にどんな道のりがあったのか、僕らは知らない。「タオルづくり」と聞いて頭に思い浮かぶのは、大きな織機、鳴り響く音。僕もそうだった。今までは。

染色工場のオープンファクトリー。目の前の光景に、僕は興奮した。固く巻かれた糸を柔らかく巻き直す。植物である綿糸についた天然油分を洗い落とす。これらの下準備がなされて初めて、糸は染料を吸い、色を変える。

染色では、水が大きな鍵を握る。今治平野を流れる高縄山系の良質な軟水。石鎚山からの地下水。今治のタオルづくりを支えているのは、美しく豊富な水資源に他ならない。

見学させていただいた工場では、一日に四、五トンのタオルを染める。そのためにその十倍の水を使う。使用後は環境に影響を及ぼすことがないように十分な処理を行い、瀬戸内海に返す。水なしでは成立しない産業だ。

かつて、この町を流れる川は「七色の川」と呼ばれていたそうだ。川の水が、ピンクや黄色だったんだよ。」

母は、幼い頃に見た近所の川の様子を話してくれた。高度経済成長期におけるタオル生産量の急増。それに伴い、川沿いには染色工場が立ち並び、大量の染色排水が直接川へ放流された。結果として、小魚やエビは姿を消し、住民の安全な暮らしさえ脅かされていた。そこで、今治市では、河川事業と下水道事業が一体となり清流復元に向けた取り組みが進められた。現在では、川は本来の水の色を取り戻し、「七色の川」の面影はない。魚や亀が自由に泳ぎ野鳥が羽を休めている。「水に使わせてもらっとるんよ。水は、糸や生地の色や発色、やわらかさと大きく関係する。だから、一滴の染料も、一滴の水も、私らは無駄にしないよ。」

かみしめるようにそう話してくださいました職人さんの言葉が胸に響く。今まで僕は、一度でもこんな風に考えたことがあっただろうか。

愛媛県 今治市立近見中学校 二年 森 温大

水は、町を、暮らしを、循環する。血液が体中に行き渡るように。物言わず、等しく。

だが、穏やかに流れる川面のそばで、僕らはそれを当たり前と思っていないだろうか。「絶えることのない清らかな水」。その水は、本当に絶えることはないのだろうか。

昨年開催されたえひめ国体。ボート競技会場となった玉川ダムは、洪水による被害を軽減するとともに、農業用水や生活用水、さらにタオルづくりをはじめとする工業用水を確保するために築造されたものだ。玉川ダムの完成後、洪水や水不足に悩まされることはほとんどなくなった。しかし、昨年は、競技開催が危ぶまれるほどの渇水。一転して、台風による集中豪雨。ダム下流には氾濫危険水位まで土色の濁流が押し寄せてくるなど、水の怖さとダムのありがたさを改めて思い知らされる年となった。たった一つのほころびから、水はいとも簡単にこぼれ落ちていく。

染色工場にあるボイラー用や洗浄用以外にも、近年ではIC産業や医薬品産業で新たな水需要が台頭してきている。と同時に、昭和四十年代には平均三六パーセントほどだった工業用水の回収率が、現在では約七九パーセントにまで上昇しているという記録を見つけた。まさに「一滴の水も無駄にしない」あの想いの賜物だろう。農業用水、生活用水、工業用水。めぐるのは同じ一筋の水なのだ。

僕は、この町が大好きだ。この町の産業が大好きだ。十年後、僕らが未来を拓く。限りある自然の恵み。その水を大切に「使わせてもらって」子や孫にバトンを渡そう。何度も何度も、水と人との関係を見つめ直そう。今よりもっとうまく共生できるように。まっさらな気持ちで、背筋を伸ばし、新しい知識や経験を吸い込もう。蛇口を閉める手に力を込める。この町の一員である誇りを持って。

一筋の水にどんな道のりがあったのか、僕は知っている。

国土交通大臣賞（優秀賞）

源流の里から未来をつくる

山梨県 小菅村立小菅中学校 一年 古谷 梨那

豊かな森につつまれている小菅村。七三〇人と人口は少ないが、村の人たちは皆家族のように過ごしている。ガラスのようにすきとおっている多摩川の源流、小菅川が村の自慢だ。そんな美しい小菅川で育てられたのは、緑があざやかで新鮮なワサビ、そして活きのいいヤマメ。小菅村では、自然そのものを生かした特産物が生産されている。

五年生の時、初めてお刺身を口にしたのはヤマメだった。歯ざわりがよく、かみしめるたびにヤマメのおいしさが口に広がった。ヤマメのとなりにあったのは、みずみずしいワサビ。ヤマメといっしょに口の中に入るとワサビのピリツとした辛さに目を見開くほど驚いた。このヤマメのコリコリとした食感とワサビのピリツとした辛さには、どんな秘密が隠されているのか気になった。村の大人にどうして小菅村の特産物が新鮮なのか質問してみると、「小菅の水がきれいだから、おいしいから新鮮なものが食べられるんだよ。」と答えてくれた。その時、私は確かワサビは水のきれいな所で作らないと元気に育たないということ思い出した。小菅村のきれいな水があるからこそ、おいしくて新鮮な特産物が食べられるのだ。

小菅村は、下水道処理人口普及率が百パーセントを達成している。平成二十七年末の国内の下水道処理人口普及率は七七・八パーセントであり、地方ではまだ下水道が整備されていないところもある。人口七三〇人の村で百パーセントというのは驚異的な数字といえる。これは村の人々の「小菅の川をよごしたくない」、「このきれいな小菅川を維持していきたい」という思いがあるからこそだ。また、村にはこんな言葉がある。「シモノシには迷惑をかけられない。」この言葉は、「下流の人には迷惑をかけられない」という意味であり、村の人たちの志でもある。下流の人のことを考えて自然を守ることは、村の住人にとってあたり前のことなのだ。私も小さい頃から村の大人と一緒に、川の清掃活動に参加し、

「ここは東京都の大切な水がめだ」と教えられてきた。私の母は東京の出身であり、まさに「シモノシ」だ。このつながりに気が付いたとき、村の人たちへの感謝が自然と湧いてきた。

小さな村でも、一人一人の気持ちがあわされば、きつといい環境をつくっていく。村の環境や特産物を守ることは、村の生活を守ることだけではなく下流の人たちの生活も守っている。私も自分のことだけではなく、もっと広い視野でものごとを考えたい。将来、自分に子どもができたとき、お風呂や水道の水が汚れていたら生活していく上で望ましい環境とは言えない。水は人の生活を守ることだけではなく、命をつないでいるということを忘れずにいることが大切ではないだろうか。「下流の人」だけではなく、下の世代にも迷惑はかけられない。

環境大臣賞（優秀賞）

室根の里から海をおもう 岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 三年 菅原 菜央

ある雨の日。

灰色の空気に沈んだ室根の山に、無数の雨粒たちが降り注いでいます。その中の一滴が、こうつぶやきました。

「もうすぐ僕らは地面に落ちて弾けてしまう。なんてはかない運命なんだろう。」

「いや雨くん、そんなことはないよ！」

答えたのは、大きな葉っぱを揺らす、まだ若い木でした。

「なぜ？じゃあ僕たちは、どうなるの？」

小さな雨粒は、若い木の葉っぱの上にとびん、と着地すると木に尋ねました。

「降った雨粒が室根山の森の土に浸みると、雨水に土の栄養分が溶け出すんだ。その水が、大川の流れに乗って、気仙沼の街を走り、やがて気仙沼にたどり着く。森の力が海を豊かにするんだよ。そう、雨くんたちが森と海をつないでいるのさ！」

そんな自然の音が聞こえてくるような美しい町、室根町。私が住むこの町では、毎年夏に「森は海の恋人」植樹祭を行っています。この植樹祭の始まりは、宮城県気仙沼市の養殖力キ漁師さんたちによるものでした。森と海には、どのようなつながりがあるのでしょうか。

今から三十五年ほど前、気仙沼湾では、ある深刻な問題が発生していました。養殖のカキがすべて毒々しい赤色に染まってしまったのです。原因は、プランクトンの異常発生による赤潮。カキは生きるために大量の海水を吸うため、赤潮の影響を直に被りました。血ガキと呼ばれた真紅のカキは、廃棄処分するほかなかったのです。

その当時、気仙沼湾に注ぐ大川沿いでは、工場の排水により、水質があまり良いものではありませんでした。また、降雨のたびに山の土が川

に流入したことも影響しました。川の源流である室根山の森林は、長く人の手が入らず荒れていたためです。

このような森の異変が、海の異変をも招いていたことに気づいたカキ漁師たちは、大川中流域の住民と力を合わせ、森への植樹を始めました。植えるのは、主に秋に葉を落とし、良質な腐葉土をつくる広葉樹です。しかし、真つぐな針葉樹と違い、曲がった部分の多い広葉樹は材木としては使えません。植樹の話が持ち上がったころは、住民の反対の声も大きかったようです。しかし、漁師たちが海と森との密接な関係を丁寧に説き、植樹への協力を感謝することを忘れずに根気よく活動を続けた結果、年々事業を拡大し現在のような植樹祭になったのだそうです。

私たちが植えた木々の向こうに、清らかな海があり、その海の命は私たちの生活に密接に結びついています。そのことを心にとめて行動することが大切だと私は思っています。だから、私は日常の中で、例えば次のようなことを心がけています。食事は食べきれぬ分だけ自分でよそい、食べ終わったら汁や油分を要らない紙で拭いてから洗います。学校で美術のパレットを洗う時も同様で、この時使うのは筆洗に残った水です。書道教室でも書き損じた紙で硯や筆を拭いてから洗っています。こうすれば、拭いた分だけ汚れを川に流さずに済むからです。

森の命は、海の命とつながっています。そして、海の命は私たちに恵みをもたらしてくれます。森と海を守るために、私たちができること。それは、まずは知ることです。命のつながりを、私たちに与えられている恩恵を知り、自然を守るために行動を起こしていくことが大事なのではないでしょうか。

食卓の向こうにある海を、絵筆の向こうにある海を、そして、森の向こうにある海を、忘れてはいけません。私たちは自然に生かされているのだから。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

豊川の清掃活動から水について考える

愛知県 豊橋市立章南中学校 三年 渡辺 風花

「水は生物にとって一番大切な物なんだよ」この言葉は私の母方の祖母の口癖です。だから母の実家に行った時、この言葉を祖母から聞かない日はありません。

今年の正月、家族で母の実家を訪ねた時、祖母と久しぶりにお風呂に入り、口癖の理由を聞いてみました。すると祖母は私が知らなかった昔の事をいろいろ話してくれました。

母が小学校にあがった頃、以前より太ったことを気にした祖母は、ダイエットをしようとして水分をなるべく摂らないように心がけたそうです。すると一週間経ったある朝、急に意識を失い病院に搬送されました。病名は脳梗塞でした。病院での対処が迅速・適切であったため後遺症も無く九死に一生を得た祖母は早く退院できたそうです。それ以来祖母は懲りて水分をこまめに摂るようになったそうです。だから私たちにも「水をこまめにとるようにしなさい」とよく言います。祖母はそんな命に関わる体験があったからこそ五体満足で生かされたことに感謝して、水がいかに生物にとって重要であるかを痛感し、水に感謝することを何かしようと考えました。

豊橋市の中心には豊川という一級河川が流れていて、その支流の清掃活動が定期的にボランティアによってなされていますが、祖母は元気を取り戻して以来その活動に必ず参加しています。私も物心が付いた頃より祖母に連れられて参加し十年程になります。清掃活動に参加してゴミを集めていて次第にわかってきたことがあります。ゴミは回収してもその量は一向に減ることなく、逆に毎年増える傾向にあります。ゴミを出すのは人間です。人間一人一人の意識を徹底的に改革しなくてはいくら清掃活動しても意味の無い事だと思ふ様になってきました。それにはどうしたらいいのでしょうか？私は悩みぬいた末ある考えにたどり着いたのです。

今や街のあちらこちらで公共施設や事物に名前がついているように橋

や堤防に命名権、宣伝広告を応募して、それで集まったお金で川の環境を守ってゆく費用を算出してみてもどうでしょうか？橋や堤防に宣伝広告を載せれば、そこを通りかけた運転手の目に留まり興味をひくものです。興味をひくということは川や水に対して無関心な人たちの意識改革に繋がってゆくのではないのでしょうか。

それともう一つ、川の環境を保つには支流・下流の清掃活動に限らず上流からきれいにしなければならぬと思います。なぜなら川は上流から下流に繋がっているからです。だから上流の森林保全も大切だと思います。

今年私は家族で豊川の源流である新城の山奥を訪れ、川の始まりを観察しておこうと思いました。そこでは昨年の長雨で一部の森林が崩れ山肌が露わになっている箇所がありました。それを見て「森林が破壊されれば、それ以下の水も汚すことになる」と思いました。

二千二十四年から新たに森林環境税が導入され、毎年一人千円を支払うことになりました。私も森林保護に繋がるこの税の導入には反対はしません、その使い道として拡大解釈せず、ストレートに森林保護の目的に使用してもらうことを期待しています。

今や日本のきれいで豊かな水は世界から注目されていて、外国の資本が金に任せて水源を持つ森林を買収しています。このままでは日本の飲み水がピンチです。

三月ブラジリアで第八回世界水フォーラムが開催され、約百七十か国三万五千人が参加し、世界中の人たちが飲料水や水の衛生について大きな関心を持っています。日本も、もつと水に対して危機感を持つて接しなければ、いずれ安全できれいな水を手に入れられなくなるのではないのでしょうか。

一人一人の意識改革は小さなことから始まりますが、いずれ大河となり実を結ぶことを信じて清掃活動を続けていきたいと思ひます。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

今も昔も

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 三年 和田 菜花

私の部屋の窓からは浄水場が一望できる。そこにある大きなプールのような三つのろ過池は、空に浮かぶ雲を鏡のように水面に映し出している。傍には、緑青が吹いて歴史を感じさせる給水タンクが天高くそびえ立つ。春にはツツジ、秋には紅葉など、四季折々の自然と調和しており、その美しさは筆舌に尽くしがたい。この敷島浄水場は私にとって、とても身近な存在なのだ。

しかし見えているのはほんの一部分で、ほとんどの設備は地下や屋内にある。ここでは主に四つの工程で浄化処理を行っている。第一に、豊富な地下水をくみ上げる。近くを流れる利根川の水ではなく、地下水を水源とするのには理由がある。長い年月をかけて水が染み込む時、土壌がフィルターのように不純物を取り除いてくれる。川の水よりも良質なので、浄化処理が簡素化され、より美味しい水になるというわけだ。大きなろ過池の底には、砂が敷き詰められており、その間を通り抜ける際にさらに不純物を取り除かれる。第二には、塩素を用いて、主に大腸菌などの人に有害な菌を消毒する。その後、人間の健康に関する三十一項目、水道水としての必須条件二十項目の、全五十一項目もの厳しい水質検査をする。これに合格した安全な水が私達の家庭へ届けられる。この水は、高度な技術とそれを担う人々の努力の賜物なのだ。

しかし世界では現在、日本では考えられないような水に関する問題が起きている。

アジア諸国では水道からきれいな水が出ないところも多い。そこで井戸水を使うのだが、地下の有害な物質を含んでいることも多々ある。身体に悪いと知りながらも、生きるためにその水を飲まざるを得ない人々がいる。

また、子供や女性が水くみに時間を奪われて、学校に通うことができない現状がある。なんと「水」は教育問題にも影響していたのだ。また、

ある地域には学校に女子トイレがないために、女子が学校に行けないという現状もある。トイレがないことが女性の自由の足かせになっていることに驚いた。これらは私の予想をはるかに超えていた。

フィリピンでは水の価格の問題がある。それは、都市部に住む富裕層が水道水を安価で使用できる一方、それ以外の地域には水道が無いので、その約十倍のお金を払って水を買っているというものだ。金持ちの方が安く水を使い、貧困にあえぐ人々の方が高い水を買わなければならないなんて、本当に変な話である。世界の現状を見ると、水と人間の生活はどこであつても密接に関わり合っているの、早急に解決すべきであると思つた。

もし安全な水が簡単に手に入るようになれば、人々の命が救われるだけでなく、子供が教育を受けることが出来たり、女性も社会にどんどん進出していけるようになる。つまり経済発展にも繋がるのだ。誰もが安価に安全な水を得られれば、暮らしやすい世界になると思う。水は、私達に幸せをもたらす一方、生きていくのに不可欠であるが故に問題の種類にもなる。私がこうして幸せな毎日を過ごすことが出来ているのは、「水」に守られているからなのだ。痛感した。水道から出る水は、ただの水ではなく実は尊いものだったのだ。

「この給水タンクは私と同じくらいの歳なのよ。」

お向かいのおばさんが言っていたのを思い出す。昭和四年から今もなお休むことなく水を送り続けたそのタンクの姿は、上州のかかあ天下の芯の強さと優しさを持った彼女の姿と私の中で重なり合った。今も昔も、みんなの笑顔の源となる「水」を守り続けている敷島浄水場を、改めて誇りに思つた。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「ありふれた水に思うー二つの感謝」 福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 二年 宇野 由里子

「走らずに前に詰めて！」

指導員の先輩方の大きな声。黙々と歩く集団。鍛錬遠足練習の日、晴天に恵まれ、ワクワクしすぎて水筒を忘れてしまった私。日頃は美しい河畔の散歩道が自慢の室見川。鍛錬遠足だけあって、先生・先輩方の雰囲気も厳しい。シジミとりや潮干狩りに来る見慣れた風景も、今日はギラギラと照り返しうらめしい。

折り返し地点でのお昼の時間。公園によくある飲み水用の蛇口を見つけ、弁当よりも何よりも先に思いつき水を飲んだ。のどの渇きが癒されるなどという表現では足りない。体中の隅々まで潤いが染み渡るようだ。一度飲み終わって、いや、またもう一度。

「はあー、ホツとしたあー。」

本当にその水道水はおいしかった。心から、有り難いと実感した。

後日、悠々と流れていたあの室見川と水道水の関係に興味がわき、調べてみた。室見川の水は福岡県糸島市の瑞梅寺の水源で生まれ、曲渕ダムに運ばれ、夫婦石浄水場できれいにされて水道水となり、私たちの家庭まで届けられているらしい。百五十万都市の福岡市では、一日になんと四十万トン、学校のプールにして千百三十杯分の水が利用され、それを近郊五つの浄水場でまかなっている。頼りは福岡市に流れる百三十二本の川なのだが、実は水の豊富な川がなく、雨が少ないときには水不足になる恐れもあるほどらしい。昭和五十三年に実際に起こった大渇水を、両親も小さい頃に体験して覚えていた。降雨量が少なかったその年は、何回かの断水を繰り返したそうだ。当時の写真には、乾き切った細かく地割れした地面や、給水車に長い列を作るポリバケツを持った市民たちが写っている。

現在、久留米市を流れる九州最大の河川筑後川から、三十キロもの距離を大きな導水管でつなぎ、水を引いている。大変だったあの遠足の三倍もの距離をはると、二十四時間三百六十五日、絶え間なく水は駆けつけてくれ

る。久留米は両親の出身地だから、福岡県下で協力し合っていることがありがたく、心強く思った。

そもそも、この貴重な水はどこからくるのか？よく考えてみると水は地球の中を巡っている。雨が山に染み込んで、湧き水となって現れて、それが集まり川となり、海まで流れて蒸発し、その水蒸気が雲となり、大地に雨が降り注ぐ。まさに大自然の営みである。我々人間も含めたすべての生物を生かす奇跡の仕組みである。ただそれだけでは終わらない。その川の水が浄化され、無事家庭まで届くまでには、多くの人の努力がある。この「大自然」と「人の努力」は、二十四時間ずっと絶えることのない営みである点が共通している。この二つが合わさって、日本にいる私たちは、いつでも蛇口をひねれば新鮮な飲み水を手に入れることができる。安心して日々生活を送ることができなのだ。

生まれてから今まで断水などにあつたことがない私も、熊本地震の際は、自然災害の厳しさと、普段の水のありがたさを思い知らされた。家族皆が大好きで通ったあの阿蘇が被災して丸二年が経った。そもそも私が毎日お世話になっている筑後川は熊本本の阿蘇生まれだ。熊本の水のおかげで日々の安心があることを思うとき、私はいつも、

「まず隣人を愛しなさい（マザーテレサ）」の言葉を思い出す。人は一人では生きていけない。まず自分に出ることから始めよう。あの遠足の日の公園の水は、阿蘇生まれの水だったかもしれない。

いつものように、また新しい朝が始まる。顔を洗うために蛇口をひねる私は、最近はずっと蛇口を少し戻す習慣がついた。阿蘇の大自然や熊本の復興を願いつつ、「大自然」と「人の努力」に感謝しながら、貴重な水を大切にしていこうと思う。

入選

水へ感謝

福島県 福島県立会津学鳳中学校 一年 今村 真生

水は、毎日の私たちの生活に不可欠なものです。水がなければ、私たちは生きていけません。私たちの暮らす日本は、水が豊富で、水に関しては不自由を感じることはまずありません。蛇口をひねれば、簡単にきれいな水を使用することができます。だから、水を使うことができることは、当然のことだと思ってしまう、私自身も普段からありがたさを感じることはありませんでした。

しかし、私は七年前に東日本大震災を経験しました。当時、私はいわき市に住んでいたのですが、地震の被害を受けて、いわき市内の全域で水道が止まってしまいました。いつも普通に使用できるはずの水が、蛇口から出てこない、トイレが流せないというだけで、こんなにも生活が困難になるのだということをもっと感じました。それでもトイレやお風呂などは、まだ数日であれば我慢することもできます。しかし、水が簡単に手に入らないということが、いかに私たちの生活に大きな影響を与えることになるのかを思い知りました。

当時、私はまだ保育園児でしたが、給水のために、ポリタンクを持って、親と一緒に長い列に並びました。ポリタンクはとても重く運ぶのはとても大変でした。それなのに、節水しても、あつという間にその水は無くなってしまいました。食器を洗わなくても済むように、皿にラップを敷くなどの工夫はしましたが、自由に水が使えないのは本当に不自由でした。また、手や顔も思い切り洗えず、衛生的とは言いがたい毎日を経験してはならず、とても苦痛でした。

しかし、七年経って、改めて自分の生活を振り返ってみると、顔や手を洗う時、少しの間とはいえ、水を出しっぱなしにしていることに気が付きました。飲もうとして入れたお茶を飲まずに捨ててしまうこともありません。食器洗いの時、水圧を考えずに、多くの水を無駄に使ってしまっていることもあります。七年前の経験を通して、水の大切さを思い知

ったはずなのに、便利な生活の中で、水のありがたさを忘れかけてしまっていました。世界には水不足に悩み、毎日、長い距離を歩き、生活に必要な水をくみに行かなければならない人もいるのだと聞きました。実際ケニアでは一日に一人当たり使用している水の量は二〇リットル足らずなのだそうです。日本人が一人当たり三〇〇リットルもの水を一日に使用しているという統計もあるそうですが、その不平等さについて、私は大きな疑問を感じました。

それなのに、水を簡単に使用できることへの感謝を私たちはつい忘れがちです。しかしそうはいっても、今送っているこの便利な生活の質を落とすことはできません。だから、日々の生活を振り返り、少しずつ積み重なっている水の無駄遣いを見直す必要があるのではないかと考えました。仮にたった十ミリリットルの水であっても、毎日節水していけば年間で三・六リットルになります。これを日本人全員が取り組むとすると、年間で四億三千二百万リットルもの節水をすることができます。これは、日本人の百四十万人以上の人が一日に使用する水量に当たります。このように考えれば、ちょっとした心がけや取り組みが大きな結果に結びつくのだと思います。だから、少しの節水でも、自分から心がけていくことが大切なのだと思います。私たちの節水という行為が、世界の水不足につながることはないのかもしれないですが、日々、水を思う存分使用できることへの感謝の気持ちを忘れずに、水を大切に使っていきたいと改めて思いました。

入選

水と生命

福島県 矢吹町立矢吹中学校 三年 二瓶 紗英

「チヨロチヨロ・・・」

用水路を流れる水の音。夕刻になると、田んぼの緑に夕日が照らされ、辺り一面がオレンジ色の世界に包まれていく。かえるの鳴き声は、夏の始まりの合図にさえ聞こえてくる。満天の星空の下、蛍の光がとてつもない幻想的だ。私は、玄関から一歩外へ踏み出すだけで、その景色をみることでできた。毎年、こういう夏を楽しみにし、体いっぱい自然を感じていた。しかし、ある年を境にその景色を見ることができなくなった。

二〇一一年。東日本大震災が発生した。家の中が散乱し、屋根の瓦やブロック塀は崩れ落ち、経験したこともない大きな揺れに襲われた。蛇口をひねっても水が出ない。地震が及ぼした影響は悲惨なものだった。一週間くらいが経つただろうか。ようやく生活用水が復旧した。しかし、用水路を流れる水は五月になっても田んぼに流れていくことは無かった。当時、私は小学一年生。用水路がこちらで破損していたことや、原発事故による放射能が私たちの体にどれほどの害をもたらすものなのかなど、全く分からなかった。

震災前の夏の夜、うちわを手の外へ出ると、目の前には綺麗な光を放ちながら飛び交う蛍の姿があった。うちわで強い風を起こして、蛍を地面に落として捕まえる。これは、祖父に教えてもらった蛍の採取法。なかなか捕まえることができずにイライラしていたことを思い出す。蛍は汚染されていない綺麗な川や田んぼ付近に生息している。幼虫の頃はカワニナという巻き貝を食べるが、成虫になると幼虫時代に食べた栄養分だけで生きるため、水しか口にしない。この蓄えられた栄養分が全くなってしまうと、命を落としてしまうため、蛍の寿命はとても短いのだ。ちなみに、カワニナ自体はきれいな水でしか生きることができない。そう考えていくと、我家の目の前にある田んぼから蛍が姿を消した原因は、震災によって水が止まり、さらには二、三年間、放射能問題

により、田んぼが荒れた状態になってしまったからかもしれない。

実際、私はあの震災の時に、水の大切さを知った。料理、排せつ、洗濯、歯みがき、お風呂など、生活用水が止まってしまったことで大パニックになった。不便さを感じる一方で、一滴の水のありがたみを感じた。役場で水をもらうことができると聞き、母と一緒に列に並んだ。みんな水をもらって安心して笑顔になっていたように記憶している。それだけ、水は生活にかかすことのできないものなのだ。私は、水こそが命の恵のように思えた。

地球の七割は水である。工場や生活排水が原因の水質汚染や、地球温暖化により、渇水や洪水が起きやすくなっている。また、世界中には安全な水を飲むことができずに命を落としてしまう人々がいるそうだ。この地球上で水問題が増えている状況を一人でも多くの人を知り、解決するための行動をとることが大切だと思う。今の私たちにできることは何なのだろうか。洗剤やシャンプーの量を考え、生活排水を減らすことなど自分にできることから始めようと思う。

水は、水辺の生き物と私たち人間の生活に欠かせないものであり、それだけでなく、あらゆる生命の源になっている。自然の災害によって豊かな水環境を失ったからこそ、その時の気持ちを忘れずに水環境を守っていく必要があると思う。

また、蛍の光が美しく飛び交う姿を見てみたい。蛍が生存できる環境を増やしていけるように、水の使い方を見直していきたい。

あれから七年が経った。祖父は少しづつ年老いている。祖父が元気なうちにまた一緒に蛍捕りを楽しめたらと思う。

入選

『水』——私なりに考えたこと

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 廣瀬 十和子

私の家の庭には、井戸のようなものがある。見た目は井戸なのだが、実際は違う。雨水が雨どいから地下のパイプを伝って、一ヶ所に貯まるようにしたものなのだ。

これを作ったのは、祖父である。ある日、私が小学校から帰ると、庭の隅で何かをスケッチしている祖父がいた。

「じいじ、何を描いているの？」

そう尋ねると、祖父はにっこり笑って言った。

「井戸だよ、井戸。正確に言うと井戸もどきだな。じいじの頭の中にあるイメージを、絵にしているんだよ。」

祖父は、アイディアの塊のような人である。私の家は、祖父が作ってくれた作品であふれている。その中でも、今回の作品は大がかりなもののように、

「さあ、忙しくなるぞ。十和子、楽しみに待っててな。」

祖父は、スケッチする手を休めずに言った。

そもそも、なぜ祖父は井戸もどきを作ろうと思ったのか。そのきっかけを、夕食の時に母が教えてくれた。

「地震のこと、覚えてる？」

それは、私が幼稚園生の時のことだった。あの東日本大震災が起きたのだ。

「覚えているよ。家に帰ってきたとたんに地震が来て、怖かった。」

「あの時、何日も断水してね。こども、じいじの家も本当に大変だったのよ。それから、ずっと雨水を使えたらなあと思っていたんですって。」母によると、祖父の構想は何年も前からあったようだ。色々調べて、雨水を貯める方法をいくつも考えていた祖父。災害時を想定した場合、トイレを流す、手や食器を洗う等、ある程度、余裕を持った貯水量が必要だ。そこで祖父は、貯水槽を地下に作ることにした。文章にすると簡単だが、これは本当に大変だった。何日も何日も、私が学校から帰ると、

祖父は泥だらけだった。初めは小さかった穴が、段々深くなって、祖父の姿が全く見えなくなった時には驚いた。

「じいじ、上がってこられる？」

私が心配して聞くと、それには答えず、

「これだけ深さがあれば、十分だな。」

と、穴の中を見回していた祖父の姿が、とても印象に残っている。

祖父は、掘った穴に土管を入れて貯水槽とし、雨どいにはパイプを接続して、雨水が流れ込むようにしてくれた。このパイプも、勾配をつけなければならず、大変だったようだ。計算通りにいなくて、何度もやり直しをしながら、祖父は諦めずに工事をしてくれた。そして最後に、穴の周りにレンガを積みあげて蓋をした。まるで、おとぎ話に出てくる井戸のように仕上がったのだ。それからは、毎日雨が降るのを待った。あんなに雨が降って欲しいと思ったことはなかった。そして、いよいよ雨の日。

祖父、母、そして私の三人で庭に行き、蓋を開けてみた。

「うわー!!貯まってる。大成功!!」

そこには、一杯に水が満ちていた。きらきら光る水面を見て、よくわからないけれど、人間にとって水は必要なものだと強烈に感じ、神妙な気持ちになったことを覚えている。

祖父は昨年、亡くなった。幸いなことに、祖父が心配していたような災害は起こっておらず、雨水は庭の水やりに使っている。私も時々手伝うが、そんな時、頭の中には使った水が蒸発して雲になり、また雨になって地上に・・・という図が浮かぶ。大きな大きなサイクルの中に、人間は入れているように見えるのだがとつくづく思う。人間は、思いのままに水を使っているように見えるが、実は使わせてもらっている立場なのだ。このことは、いつも誰でも忘れてはいけない視点だと思う。

入選

ふるさととの川

栃木県 矢板市立矢板中学校 二年 箱田 緋優璃

「お母さん、この水、とってもおいしい。何か甘いよ！」

私たち一家が宇都宮市から矢板市に引っ越したとき、私が最初に母に伝えたのは水のおいしさでした。水を「おいしい」だとか「甘い」だなんて思ったのはそれが初めてで、まだ保育園児だった私には、それが不思議でなりませんでした。これが矢板の水に関心を持った最初の出来事でした。

私が六年間通った川崎小学校は、ともに那珂川の支流である内川と宮川の合流点にあり、水環境がとても美しい学校でした。学校の周りにはほとんどもが田んぼで、水生動物や水生昆虫がたくさんいました。合流点の宮川寄りには魚がよく集まる場所で、コブナやハヤをよく網ですくったものでした。ときにはカルガモやシギも飛来したりして、いくら見ても見飽きない、無料の水遊園でした。

内川も宮川も水源は高原山です。隣町である塩谷町には日本名水百選に選ばれている尚仁沢がありますが、その水源も高原山です。私は保育園児のときから、矢板の水は日本でも指折りの名水だと思っています。

家が宮川沿いにあるので、私は宮川の方に親しみを感じています。宮川は湧水地から二十キロメートル足らずの川ですが、実に様々な表情を見せてくれます。宮川を遡っていくとすぐ左手の崖の上に塩谷氏の居城だった川崎城の跡があります。最も栄えたのが鎌倉時代。矢板の原点と言ってもよい場所です。そこから北上すると川に沿って川崎反町集落です。昔ながらの米作農家が多い地域です。少し山間部に入ると幸岡地区、片俣地区です。狭い土地にも水田が作られています。先人たちの苦労がうかがえます。長井地区に入ると丘陵地帯を中心にしたリング栽培農家が並びます。低い土地には水田が広がり、今の時期は田植えが済んだ頃です。上流に向かうと、養魚場を兼ねた釣り堀があります。宮川との深い関係が感じられるところです。さらに上流にのぼると寺山ダムがあり

ます。寺山ダムは一九八四年に作られたロックフィルダムです。寺山ダムの水は上水道、農業用灌漑、水量調整に使われています。寺山ダムのお陰で矢板市全般の農業が安定したと言われています。寺山ダム湖沿いの道路を進むと出井水神社の湧水が湧き出ています。この水は遠くから汲みに来る人がいるほどの名水です。無料で汲み放題というところにおいてもなしの心を感じました。さらに進むと、左手に宮川溪谷が静かに流れをたたえています。源流の湧水地付近は県民の森できれいに整備されています。矢板市がどれだけ水と真剣に向き合ってきたかを、宮川を遡っただけで感じ取ることができました。

宮川には矢板の歴史が刻まれています。そして、その時代時代の人々の様々な思いや願いにあふれていました。現在の矢板市は水害には無縁だと思っていました。確かに寺山ダムや塩田ダムが上流できてから水害はほとんどなかったようです。けれども最近の異常気象、特に台風や集中豪雨の傾向を考えると、安心できないと思いました。

特に内川の増水には注意を払う必要があります。もともと内川はもつと川幅が広がったのだそうです。そこに堤防を築き蛇行していた川を直線的に直したのです。しかも、内川の上流には水を調節するためのダムがありません。高原山で昨年の九州北部豪雨のような集中豪雨があれば、大惨事に繋がるかもしれないのです。内川にも宮川のような歴史や思いが残っているはずで、ふるさととの川に災害の歴史は刻みたくないと思います。そのためにも行政も個人も意見を出し合って、正しい水害対策を進めておくべきなのです。異常気象による想定外の水災害が起こってからは遅いのですから。

入選

水と共に

栃木県 矢板市立矢板中学校 二年 川崎 桃枝

昨年の八月、私の住む地域では十六日間連続で雨が降るといことがありました。その長雨の直後に台風が襲来したので、洪水が心配されました。実際に大雨・洪水警報が発令され、警戒が呼びかけられました。私の家は川のほとりにあるのでなおさら気がかりでした。幸い台風のコースがそれたので、思ったほどの被害もなくほっと胸をなでおろしました。けれども長雨の降り続く間に襲った、八月十九日のゲリラ豪雨では近隣の大田原市、さくら市、高根沢町、県央でも県南でも浸水被害で交通機関が大きな影響を受けました。

私の住む矢板市で洪水被害があったのは、一九九八年の那珂川水害のことです。那珂川水系の内川が氾濫しました。私の生まれる前のことです。そのときも家のすぐ近くを流れる宮川は洪水を免れました。上流の寺山地区に作られた寺山ダムができるまでは、宮川はかなりの暴れ川だったようで、上流から大きな岩が転がってきたのだと地域の高齢者から聞いたことがあります。寺山ダムは中規模のロックフィルダムで、一九八四年に作られました。上水道の水源、灌漑用農業用水、川の水量調節に使用されています。寺山ダムの少し上流の道路わきには「井出水神社の湧水」と呼ばれる名水があり、宮川の水源のひとつですが、寺山ダムは矢板市にとつての水の守り神のような存在です。

ゴールデンウィークになって、田んぼには一面に水が張られ、田植え機があちらこちらに見られるようになりました。ダムができるまでは、田植えの時期が降雨量次第でズレ込むことがよくあったのだそうです。今ではゴールデンウィーク明けには整然と植えられた苗が五月の風に吹かれています。

私の住む地域は高原山に向かう丘陵地帯で杉や松がたくさん生えています。大きな水害から免れているのは、森林の保水作用もあると思います。

矢板市は決して雨の少ないところではありません。特に夏場は夕立が多

く、短時間ですが、ゲリラ豪雨のような激しい雨も珍しくないので。高原山に近いせいで天気が変わりやすいのです。

それでも水害が少ないのは、寺山ダムと森林や水田、畑などがバランスよく治水しているからだだと思います。今後も私たちが水と安全に生活していくためには、このバランスを守るために細心の注意を払うことが必要です。

また、矢板市には温泉や溪谷沿いの遊歩道、湧水の無料取水場など、水を通しての癒しの場がたくさんあります。川のほとりで育ったせいか、川のせせらぎを耳にすると心が落ち着きます。特に森林浴をしながら聴くせせらぎの音にはどんなストレスも洗い流すパワーを感じます。水はまさに命の源です。

私は、水の親しみ、水を愛する故郷を誇りに思っています。

矢板市は水の豊かなところなので、なかなか気づきませんが、世界規模で見ると、日本の降水量は一人当たりすると百七十七か国中九十六位と決して上位ではありません。ただ、水の活用方法が上手なので、水が豊かに感じられるだけです。ですから、私自身も水の豊かなところに住むからといって油断はできません。水に感謝し、今まで以上に大切に水を使う必要があると思います。

現に高温多雨のアマゾン流域で日照りが起こり八メートルも水位が下がったり、オーストラリアの干ばつで小麦が壊滅的な打撃を受けたりなどと事実がたくさんあるのです。温暖化や海水温の上昇や下降、偏西風の変化で、気候はどのようにも変化するのです。

私たちは異常気象の中で生活していると言ってもいいでしょう。注意を怠り、判断を誤れば、水は恐ろしいものとして牙をむくことでしょうか。私たちの水と共に生きるための知恵が問われているのではないのでしょうか。

入選

みちびき

埼玉県 秩父市立尾田蒔中学校 三年 大澤 百恵

「水が少ないと、困るよホント。」

私の父がよく言う言葉だ。

父は川をゴムボートで下るレジャースポーツのツアー会社を経営している。だから、父の言う「水」は川の水量のことだ。

川の水量が少ないと、川底の岩にボートを擦ってしまったり、進むスピードが落ちたりするため、川の水量がツアーの質を決める。

私は水について考えるというと、「節水」や「水を大切に」などの日頃から学校で教わっている「言葉」だけが浮かぶ。水を大切にすることと自分のくらしがどのように結びついているのかは、考えたことがない。

だが、父は、
「水は大切な商売道具だ。水がなくなったら仕事ができなくなる。」
という。

もし、何日も何日も雨が降らなくて、水が手に入りにくくなったとしたら、私はとりあえず飲み水の入手だけを考える。

そんな私に父は、
「そうなるから焦っても遅いと思うぞ。だから、そうならない様にシヤワーを出しっぱなしにするなよ。」
と言った。

私と同じように、多くの人は水を意識して生活していない。それ故に水に対する理解や関心を持っていない。もし、水が手に入りにくくなくても、心の底では楽観的に考えてしまっただろう。

隣の家のおじさんは、農業をして暮らしている。私は彼に「水はおじさんにとってどんなもの」なのかと聞いたことがある。その時彼は、

「野菜が作れるのも、水のおかげだから大事なもんだ。不足しねえように大切に使わないとな。」
そう答えた。

私は、父とおじさんの言葉で気が付いたことがある。彼らは、水を大

切にすることと自分達が生きることが深くつながっていると、理解しているのだ。本当に水が手に入らなくなったら、という想像をして危機感をもって生活している。

私も日頃から水を使い過ぎないように心掛けてはいるが、水に対して危機感をもったことはない。だから、私は彼らの言葉にどきっとした。

例えば、私達が何かの原因で水不足に直面したとする。そのとき、きっと私達は「大変だ。どうにかしなきゃ。」という気持ちになる。しかし、多くの人は本当に水が入手不可能になるまで心の底から危ないと思えないのではないか。

私は、社会全体の水に対する危機感のなさは、人々の水への理解や関心の低さが原因だと思う。父やおじさんは、仕事という形で水と関わっているために「本当に手に入らなくならないように、日頃から水を大切にす」という考えを持っていたのだ。

彼らのように、私達一人一人が水に対する関心を持って生活していくことこそ、水を守っていく最善の方法なのではないだろうか。

私は自分が生きていることと、水がどのように関わっているのか、水が手に入らなくなったらどうなってしまうのかを考えて、水への理解を深めていきたいと思う。

水とはたらくこと、水と生きていくこと、そのどれも水がなくなったらできないことだ。

昨日の朝、顔を洗ったとき私は水を出しっぱなしにしていた。

だが今日、顔を洗っているときにふと「今の出しっぱなしが、水不足につながったらどうしよう。」という考えが頭を過ぎり、私は無意識に水を止めていた。

一人一人の想像力と小さな行動が、水の未来をより良い方向に導いていく大きな力になる。私は、そう信じている。

入選

見沼代用水路と私

埼玉県

浦和ルーテル学院中学校

三年

砂川

友美子

「雨の匂いがする。」いつの間にか降り出したのだろう。洗濯物を取り込むため、ベランダに飛び出した私はそう思いました。それは空から落ちてくる雨粒の匂いなのか、雨を吸った草木から、それとも染み込んだ土から蒸発した匂いなのでしょう。少し温かくやわらかな匂い。私はこの匂いが大好きです。雨は緑を育て、生き物すべての命を育む、空から地上への贈り物。雨によってもたらされた川や湖の水、湧き水や地下水は、私たちが毎日飲んでいる水のもとです。水は私たちが生きていくうえで、欠くことのできないものです。

人は大昔から水と深く関わりながら生きてきました。エジプトやメソポタミアなどの文明が栄えたのも、そこに豊かな水が流れ、土があり緑があったからだと言われています。私の暮らすさいたま市には、「見沼代用水路」があります。一七二七年、八代將軍徳川吉宗の命令で、ここ見沼を埋め水田を作り、幕府の収入を増やす計画が立てられました。吉宗は、新田開発に手柄のあった井沢弥惣兵衛を紀伊より呼び寄せます。弥惣兵衛は見沼を干拓し、利根川から水を取り入れた用水路を完成させます。この用水路は、見沼の代わりということで見沼代用水路と名づけられ、現在も私の家の近くを流れています。この水路とその後造られた見沼通船堀には弥惣兵衛たちのたくさんの知恵と工夫、そして労力が注ぎ込まれています。見沼通船堀のおかげで、収穫物を江戸へ、また江戸から生活用品や肥料などを武蔵国に運びこむことができるようになりました。武蔵国は江戸を支える穀倉地帯となり、また江戸の文化や繁栄がここ武蔵国にもたらされるようになったのです。この構図は、古代文明の繁栄が大河によってもたらされたものと似ているように思います。

今、見沼田んぼの大半は畑や公園、空地や造成地に変わりました。少なくなつた見沼田んぼの自然に触れようという水田体験の活動があります。五月、水が引かれた田んぼがキラキラ光っています。私は長靴の代

わりに厚手の靴下を履き、田んぼに足を踏み入れました。ずぼっとした、ぬるっとした、でも心地よい感触と冷たさが足から伝わってきました。私たち参加者は水田の端から一列に並び、かけ声と共に苗をしっかりと植えていきます。足が抜けずに尻餅をつく人、三人がかりで抜けない足を引っ張る人たち、田んぼの向こうへ着くころには、頭の先まで泥だらけです。そして振り返り水田を目にしたとき、緑の若々しい色、輝きに息をのみました。苗の自然でやわらかな姿と、その先遠くさいたま新都心にある高層ビル群の直線的・デザイン的な姿が不思議と美しく、自然と都市の融合を感じました。夏場には暑く苦しい草取り、日に日に伸びる稲の力強さがまぶしく映りました。秋には待ちに待った収穫、稲穂の香りに触れ、用水路がもたらす恵みに感謝しつつ、お米を頂きました。

現在、見沼代用水路の水は農業用水として利用される他に、水道用水としても利用されています。また、見沼には古くから龍神さまの伝説がありました。この龍神さまが用水路工事の知恵を授けたとも伝えられ、弥惣兵衛は、近くの万年寺に観音菩薩像を祀り神灯を寄進し、龍神さまの霊を慰めたと言われています。この龍神さまから生まれたのが、さいたま市のPRキャラクター龍の「ヌウ」です。見沼の歴史や自然と、大都市として発展するさいたま市の共存を願う思いが、この「ヌウ」に込められているような気がします。見沼代用水路が完成して、間もなく三百年を迎えようとしています。時代が変わっても、私たちの暮らしを支える大動脈は水です。この限りある資源を大切に感謝しつつ使い、未来へつないでいくことが私たちの務めなのです。

入選

ワクワクして水の課題に取り組む

東京都 新宿区立新宿西戸山中学校 二年 原 奈々佳

「お母さん、郡山の水はおいしいね。」そう私が言うと、母は郡山の水は猪苗代湖から流れていることを教えてくれました。

私の母は福島県郡山市の出身で、今でも祖父母はそこに住んでいます。毎年のように祖父母の家へ遊びに行っていた私にとって、猪苗代湖はとてもなじみ深い場所です。夏には水遊びをしたり、冬は白鳥を見に行ったり。遊覧船にも乗りました。

しかし、祖父母の家から猪苗代湖までは車で一時間以上かかり、結構な距離があります。では、その長い距離をどのようにして水が通ってくるのだろうと疑問を持ち、母に聞いたところ、「安積疏水」と調べてごらん、と教えてもらい、興味を持ったため調べてみました。

今でこそ水に豊まれた土地となっている郡山ですが、かつては荒涼とした原野が広がっており、小説家、宮本百合子の処女作「貧しき人々の群」では郡山の極貧とも言えるような農民の生活をモデルにした辛く厳しい物語が描かれています。現在郡山は人口三十四万人と文化都市になつていますが、明治時代初めの人口は僅か七千人、その上水の便が乏しく古来から一度も耕されたことのないような荒地でした。

そんな状況の中、宮本百合子の祖父、中条政恒が赴任し、この土地を開墾することとなっていきます。郡山から猪苗代湖までの距離は約三十キロメートル、その長距離をどのようにして水を引かせるか。中条の試行錯誤が始まりました。彼はまず、農民たちのひどく貧しい暮らしを変えたいという強い思いで安積原野一万ヘクタールの大規模開墾を考えます。その時、幸運なことにこの話が明治天皇の東北巡幸のために福島を訪れていた大久保利通の目にとまり、世紀の大事業が実現することとなりました。

私が興味深かったのは、中条が計画者であるにもかかわらず、自らの足で安積の土地を調査し、その調査結果に基づいた理論的な計画を立て

たことにより多大な信頼を得たことです。更に、この工事では膨大な費用がかかる為、開拓の資金を自らの手で集めました。

私は、中条の安積原野開拓に対する熱い思いと人情深さ、そして理想を実現させてしまう行動力に感動しました。実際に大久保も中条の姿に突き動かされ資金集めに奔走するようになるのです。

中条の思いと時代の幸運とが重なって展開していったこの大事業。このことを知ったとき、私はとてもワクワクしました。きっと中条や大久保、そして当時の郡山の人々も私と同じようにワクワクしていたのだと思うと、一層素敵なストーリーだと感じます。たった一人の大きな気持ち、事業を通して人々の気持ち、文化、土地の価値さえ変えてしまうのかと心が震え上がりました。

私は、水が人々の努力によって大地そのものを変えることを知り、水ってこんなにも世界にとって大きな存在なんだということを改めて感じました。かつての郡山のように、今でも水不足で苦しんでいる人々がたくさんいます。異常気象による水害や地球規模で起こる地震の津波など、世界は今大きな困難を抱えています。かつて中条たちがそうしたように、少しでも自分にできることを行い、自ら積極的に、かつ変わりゆく世界に「ワクワク」を感じて行動することが水に対する課題を取り組むための大きなヒントだと思いました。

入選

井戸から考えた水の大切さ

神奈川県 洗足学園中学校 二年 佐藤 美鈴

祖父の家の庭には古い井戸がある。私にとって井戸は、昔のお化けが出てきそうで怖い印象が強かったのだが、井戸の話は祖父に聞いてみた。どうやら江戸時代からその井戸はあったそうだ。祖父が幼い頃は飲み水、洗濯、お風呂と生活用水のほぼ全てを井戸の水でまかなっていた。水はつるべ式で桶を使って汲んでいた。その後技術が進み、手漕ぎ式で汲むようになり、電動モーターにまでなった。昔ほどの家にも井戸があったわけではなかった。井戸の水は、どんどん汲み出した方が水質を維持できるので、近所の人達にも開放し、水を汲みに来る人もいた。水を通して近所との交流もあった。熟語のテストの一つにしか感じていなかった「井戸端会議」という言葉も、そんな人々の交流から生まれたのだと思った。当時は、今はもういないであろう井戸の底の石を磨く職人がいた。また、井戸には水の神様がいると信じ、おはらいなどもしていた。しかし、上下水道が発達してからは水道の方が便利になり、井戸の水は長い間使われなくなった。今はもう飲用には適さない水質となったが、今でも井戸には水が湧いている。

私は生まれた時から、蛇口をひねればいつでも水が出る便利な生活をしている。水に困ることが無い生活をしてきたが、東日本大震災の時に、水道が止まる経験をした。私はまだ幼かったので、水が出ないことを頭で分かっているが、つい蛇口を開けたり、トイレのレバーを動かしてしまったり、水が一滴も出なかった時の落胆を今も覚えている。電気が復旧し水道が回復した時は、水が再び出なくなることを恐れて、水を汲みおいていたことも覚えている。歯磨き用のたった一杯のコップの水を大切に使った。「明日の水」を考えた初めての経験だった。振り返ってみると、自分が「便利な生活をしてきた」ということを初めて思い知らされた時だった。震災後は非常用として、井戸の存在が見直されたそうだ。

祖父達の時代の人々も水道の方が便利だからと、井戸の水を汲む大変

さから解放され、便利さを享受した。地方でももう井戸が不要になり、危ないからと埋めてしまった所も多い。

年を重ねてからのことだが、祖父は再び庭の井戸の水を使うようになった。植物にやる水が湧いているのが有難く感じているそうだ。昔のようにつるべ式で水を汲み、庭の植物にやっている。自然に湧いた水を手動で汲み出す。毎回必要な分だけ汲み出す。井戸は水量も温度も比較的安定しているが、日照りの年は、落とし入れた桶が井戸の底につくことで、湧き水の量を感じ取れたそうだ。テレビのニュースでダム貯水量を聞くのは違った、自然の水の感じ方だと思った。

私は便利な世の中のお陰で、随分手間が省け、効率よく過ごすことができている。水についても同じだ。しかし、便利さと共に水の大切さを感じる必要があると思った。どのようにそれを感じることが出来るだろうか。もちろん、環境問題が水の問題と直結していることから改善策を考えていくことも大切だ。便利さを追求し、限りある水を使えない水にしてはならない。もっと身近なところではどうか。かつて井戸水で生活していた人々が「桶に汲み取った水」で、ある程度「量」を意識していたように、「今日の何用の水」という風に、皆が「量」を意識して使ってみてはどうか。私が震災の時にコップ一杯の水を「歯磨き用」と意識したように。暮らしの中の水の大切さ、水がきれいであることの有難さを感じ続けたい。今日の水、明日の水から、未来の水について考えるきっかけになった。次に祖父の家に行った時には、井戸の水を汲んで、水の使い方について考えてみたい。

入選

永遠に水と暮らしていくには

神奈川県 聖ヨゼフ学園中学校 三年 本多 みなみ

水はこの地球に存在するほぼ全ての命の糧です。草花も鳥も動物もそして人間も、水がなくては生きていくことができません。その中でも人間の生活において水は生活を彩り、助ける役目を果たしています。蛇口をひねれば、透明で、おいしい水が出てくる。これは日本が世界に誇れることの一つだと私は思っています。しかし、そんな豊かな水に恵まれた日本も、ここ近年の間、降水量は減少傾向にあり、大きな問題となっています。水を限りない、永遠に続く資源にするために、私たちができることはあるのでしょうか。

皆さんにふるさとがあるように、水にもふるさとがあります。それは森です。雨が森に降りそそぎ、やがて川や海に流れ出たり、土にしみこんで木の根っこに吸い上げられて蒸散したりする。これらのことをくり返し、くり返し行なって水は循環しているのです。以前、山登りをした際に、水が岩のすき間から少しずつ流れ出ているのを見ました。人間の手を加えているわけでもないのに、こうして自然と水が流れ、私たちの家庭や生活の中に安心して使える姿となつて運ばれてくるのかと思うと私は森や自然の力に圧倒されました。また、森は豊かな水を守るだけではなく、他にも私たちの日々の暮らしを守る役割も果たしているのです。何百年、何千年とたくわえられてきたやわらかな森の土は、二酸化炭素を吸収して、酸素をつくりだして空気を綺麗にしたり力強く地面にはつた木の根は土砂崩れを防いだりと、森は私たちの身の安全になくてはならない大切なものなのです。森は何の見返りもなく、私たちに自然の恵みを与え、水という名の命の糧を送り続けてくれています。それに対して私たちが恩返しができていくかというと、残念ながらそういうわけではありません。都市化が進み、様々な建物がたち、私たちの生活が便利になつていく中で、森は苦しみ続けているのではないかと私は思っています。人間の勝手な理由で荒らされてしまった森は、荒らされていない

森と比べ、森としての働きを失ってしまふのです。森は声を出すことは出来ません。しかし、その森の人間に対する悲しみの訴えは巡り巡って、私たちの生活に影響をおよぼしているのです。木が少なくなつてしまったことにより発生する、洪水被害。また、長い間、雨が降らないことによつて起こる水不足。

このままでは水が「永遠に続く資源」と断言できる保証はありません。そのためには、新たな時代を切り開いていく私たちに責任があると、私は感じていきます。

きつとこれから先、今よりもより便利な生活が送れるようになることでしょうか。しかし日本が世界に誇ることができる豊かな水を守り続けていくには、やはり森を守り、育み、活用することが重要視されると私は思います。決して大きなことをしなくてはいけないという訳ではなく、地域の水源を守る取り組みに参加してみることや、少しでも森への興味を抱くことで、自然と普段の生活の過ごし方も変わってくるのではないかと私は感じていきます。そして、私自身も未来の責任を担う者の一人として自分に出来ることを考え、積極的な行動を心がけたいと思います。

入選

未来を支える農業用水

山梨県 北杜市立甲陵中学校 三年 上野 桜

私の祖父は、八反の水田で稲作をし、年間約三十五種類の野菜を育てている。私と祖父の暮らす山梨県韮崎市一ツ谷地区は、盆地のため夏は暑く、冬は八ヶ岳風が吹き寒い。この環境で、年間三百六十日も農業をしている努力家な祖父を私は尊敬する。

祖父は毎年夏になるときまって「田んぼに水が来てないから、早く当番に電話するじゃんけ。」と言う。一ツ谷地区には、一級河川の釜無川が隣接していて豊富に水が流れているにも関わらず、水田の水が足りないとは一体どういうことだろう。私は、その疑問を祖父に尋ねてみた。すると、祖父は私たちの暮らす一ツ谷地区の切実な農業事情を教えてくださいました。

韮崎市には一級河川の釜無川以外に、「徳島堰」という韮崎市と南アルプス市を結ぶ全長十七キロメートルの農業用水路がある。江戸時代から続くこの徳島堰では、昭和四十年から国や県による釜無川右岸土地改良事業が行われた。堰をコンクリートで固めて畑地灌漑調整池を設け、その池に水を取り入れる大がかりな工事だ。この工事により、川の導水管を通じて遠隔操作で末端のスプリンクラーに水が送られるシステムが構築された。先人たちの努力のおかげで、フルーツ王国山梨が誇る南アルプス市の果樹園地帯に、農業用水が供給されるようになったそうだ。

では、なぜ一級河川の釜無川や徳島堰という立派な農業用水路があるにも関わらず、一ツ谷地区では夏に農業用水が不足するのだろうか。それは、夏になると釜無川の水量が減り、農業用水路に入り込む水量が減るからだ。また、徳島堰の導水管は当地区には整備されていないからだ。稲作農家たちも自分たちで何も改善しなかったわけではない。土のうを使って釜無川の水を農業用水路に多く引き込もうと努力したが、年々稲作農家が高齢になり、土のう作りが重労働で困難になった。それ以降、土のうの代わりに重機を使用し、釜無川から水を引き込む水口掘りを夏

に三回行うようになった。毎年、韮崎市役所の農林課に依頼して重機による作業してもらっているそうだが、祖父の話によると、この方法もその場しのぎであまり効果がみられないそうだ。自治会などで話し合ったが、今はこの方法以外に具体的な対策がないという結論に至ったそうだ。しかし、のんびりしたことばかり言っているのではない。なぜなら、農業用水は地域で火災が起きた際の防火用水としての役割もあるからだ。本来、農業用水は私たち住人にとって必要不可欠な水だ。だから、将来の農業用水確保を私は心配している。

近年、日本各地で農長の後継者不足が問題となっている。どの地域でも頭を悩ませている問題だが、この一ツ谷地区も同様だ。当地区の稲作農家たちは、米の評価ランキングで最高評価の特Aを五年連続受賞したことがある「梨北米こしひかり」というブランド米を育てている。しかし、このような素晴らしい米を育てているにも関わらず、毎年農業用水の確保に苦労しているのが現状だ。そのため、近年では水田を売ってしまったり、子供が跡を継いでくれずに農業を辞めてしまったりする家も出てきた。私はこの地区に暮らす住人の一人として、また農業を活性化させたい若者の一人として、まずは夏場の農業用水確保が当地区の後継者不足を改善させる第一歩だと考える。第一次産業である農業は、近年衰退しつつあるので、その勢力を復活させるためにも農業用水を重要視するべきだ。一ツ谷地区の稲作農家や自治会は、この状況を市議会に陳情するなど、もっと声を上げて行政に強く働きかけるべきだ。先人たちの築いた農業用水や稲作文化を守るため、未来の農業用水を支えるためにも、多くの人に農業用水に関心を持ってもらうことが大切だと私は考える。

入選

今の僕たちの使命

山梨県 北杜市立甲陵中学校 三年 池田 歩夢

雄大にそびえたつ八ヶ岳のふもとにある北杜市の中学校に通い、三年目の春を迎えている。

毎日、通学の電車から見る風景は、まさに絵に描いたような絶景である。西に甲斐駒ヶ岳、東にみずがき山といった日本でも有数な山が、季節とともに表情を変え、毎朝出迎えてくれる。また、その山々からは、豊富なわき水も出ることから、北杜市は、山紫水明の地と呼ばれ、全国屈指の「名水の里」として有名である。

昨年、総合的な学習の時間に「水」をテーマにした特色のある授業があった。僕は、「名水の里」と呼ばれている地ならではの、大変興味深く、楽しみな授業であった。授業では、この北杜市の拠点にした天然水のメーカーを訪ね、この地の水について学習を行った。この学習で、北杜市の天然水は、甲斐駒ヶ岳をはじめとする標高三千メートル級の山に降った雨や雪が、南アルプスの花崗岩層で二千年以上の長い歳月をかけ磨かれ、その結果ミネラルをたっぷり含んだ清らかな天然水が出来上がるということを知った。

そして、一番驚いたのは、この美味しい水をつくり続けるためのメカニズムだ。美味しさを生み出す秘密、それは「ふかふかの土」ということを知った。

いい水をつくるために最も大事なものは、日々健やかな森を育む活動をし、土壌を健康なものにすることが、欠かせないと知り、大変驚いた。森林は、緑の「自然のダム」なのだ。

かつて日本には、木を多く植えた時代があったそうだ。人工的に、木をたくさん植えると、森は、真つ暗になってしまう。そうすると、土を柔らかくしてくれる下草や微生物が育たなくなり、土は固くなってしまふのだ。そのような暗い森にいくら雨が降っても、水は土壌に浸透せず、表面を流れて川へと向かってしまい、肝心の水は山に残らないことにな

ってしまう。美味しい水が誕生するのには、森林の水源かん養機能が不可欠で、自然の力が関係してきているのだ。

このことを知り、僕は、生きていくうえで必要不可欠な水を守りたいという気持ちを強く思うようになった。そこで、今の僕にできることはなんだろうと考え、両親に相談してみた。父は、以前仕事で環境や森林に携わる仕事をしていたので、「やまなし森づくりコミッション」という組織があることを教えてくれた。

この「やまなし森づくりコミッション」について調べてみると、緑豊かな森林を守り、その機能を高めながら、健全な状態で次の世代に引き継ぎ、積極的な森づくり活動に取り組んでいる組織ということを知った。

今年、僕は、この森づくりの活動に参加してみようと思う。まずは、今、森がどのような状態かを知ることからはじめ、森林の水源かん養機能を少しでも回復させ、後世にも美味しい水が残せるように、微力ではあるが貢献したいと思っている。

そして、このような地道な活動が、適切な森林の間伐へと繋がり、雨等を土壌にゆっくり浸透させ、洪水や渇水等を緩和しながら、清く澄んだ美しい水を生み出す森林機能回復への後押しになればと思う。今回、水の学習をしたことで得た、森林の持つ水源かん養機能に、今後も関心を持ち続け、より一層健やかな森が育む水資源を大切に、自らも積極的に森を守る活動に参加し、未来へ繋ぐ努力をすることこそ、今の僕たちの使命だと考える。

入選

繋がる節水

「結」。ちよつと手伝つて。」

今日も母の元気な声が聞こえる。私の家は、小さな村で、小さな旅館を営んでいる。周りを山で囲まれた、人口七三〇人の多摩川の源流、山梨県小菅村。生い茂る緑、色鮮やかな草花、透き通った川の水。綺麗な大自然を求め、今日も誰かが、我が家を訪れる。

両親が働いている姿をいつも近くで見ている私にとつて、「水」は身近な存在だった。例えば、お風呂やトイレなど水場の掃除や、洗濯、料理などにも膨大な量の水を使う。また、夏場の合宿では、大勢のお客さんが毎日大量の水を使う。蛇口をひねったとき、一分間に出る水の量は十二リットルにも及ぶという。それを私たちは一日使うのだから、きつと莫大な量の水を使用しているのだろう。ましてや旅館業となおさらだ。お客さんが使用する分と、家族が生活する分と二倍だからきつとももの凄いや水量の水を消費しているに違いない。旅館業と水は、切っても切り離せない存在なのだ。

そんな生活が「普通」だと思つていたある日、学校の先生が、こう話しかけてきた。「結ちゃんの家は旅館だから、水もたくさん使うよね。」その何気ない一言に、はっとした。そうだ、今まで水はたくさん使うのが「普通」だったけれど、あんなにたくさん水を使うのは、資源を無駄使いしてしまつていのではないか、もしかしたら、「普通ではない」のだろうか、と改めて気付かされたからだ。

心配になった私は、あんなに水を使って大丈夫なのか、両親に聞いてみた。すると、「節水をしているから大丈夫だよ。」

と答えてくれた。「節水」とは、具体的にどのようなことをしているのか、掘り下げて聞いてみることにした。

両親の話によると、旅館では、二つのことで節水に協力しているそうだ。

山梨県 小菅村立小菅中学校 二年 廣瀬 結

一つ目は、お風呂場の改装だ。以前は、蛇口をひねって水を出すものだったが、出しっ放しになっていることがあったため、無駄遣いしてしまつていた。そこで、蛇口をスイッチに変えて、一定時間経つと水が勝手に止まるものにしたところ、出しっ放しが無くなり水の使用量が格段に減つた。

二つ目は、残り湯の活用だ。冬場は、お風呂に入るお客さんが少ないため、そのお湯を洗濯に使っているそうだ。洗濯のときも水を多用するため、残り湯を活用することによつて、かなり節水できる。

また、家庭でも節水をするように意識して、シャワーを出す時間を短くしたり、手を洗うときに水を止めたりしているそうだ。「どうしても水をたくさん使う仕事だから、できることから協力していかないかね。」と、父は言った。その言葉を聞いたとき、私は再びはっとした。お客さんに、水を満足に使ってもらいたい。同時に、小菅村のきれいな水を大切にしていきたい。二つの気持ちのバランスをとることは難しく、できることも限られてくると思う。しかし、その中で、できることから少しずつ節水に協力している両親の姿が、とても大きく見えた。急に、今まで水に無関心だった自分が恥ずかしくなつた。お風呂や歯みがきのときの節水は、誰にだってできることだ。これからは両親を見習つてできることから少しずつ協力していきたい。

私達が一日に使う水三百リットルのうち、本当に必要なのは約二リットル。そう考えると私たちは、水を使い過ぎていないだろうか。小菅村の綺麗な水は、綺麗な自然をつくる。その綺麗な自然を求め、私の家はたくさんの人に訪れてもらえる。だから節水をしなければならないのだ。水を守ることで、自然を守り、村を守り、我が家を訪れてくれる人との繋がりを、大切にしていきたい。

入選

水の災害のバトンは渡っているのか

静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 寺門 鈴音

「水」。それは我々が生活をおくっていく上で欠かせないもの。自然からの大きな恵みで、日本では水道の蛇口をひねればきれいな水が出てくる。その、普段何げなく使っている水がどれほど怖いものか知っているだろうか。

水はさまざまな自然災害をひき起こす。たとえば海溝型地震がおきれば津波が起る。大雨などで地面に水がしみこみ、その土地がもろくなれば土砂崩れが起る。堤防が決壊すれば住宅に水が流れ込む。その他にも水にかかわる多くの自然災害があり、最悪の場合は犠牲者が出ていることは皆、知っていることだろう。しかしそれは、経験したことのない人にとってはテレビの中、新聞の中の世界で、関係のないことだと思っただろうか。

私は静岡県伊豆の国市というところに住んでいる。そこをふくめた、伊豆全体が昔、大きな台風の影響にあった。私の家族はもちろん、地域の人は皆知っている大きな台風だ。それを「狩野川台風」という。しかし、この台風を知らない人もいるということに驚くことがあった。私は今、別の市にある私立の学校に通っている。そこには県外からも多くの生徒が通っているが、伊豆をはじめ、沼津市、三島市、清水町、長泉町など狩野川に近い地域の生徒も多くいる。そこで、私はそれらの地域の友人に狩野川台風のことについて尋ねてみた。友人たちは「知らない」と口をそろえて言った。狩野川台風は死者行方不明が一二六九人、耕地被害面積は八万九二三六haという大災害だ。これだけの大きな犠牲者と被害を出した災害のことを、地元に住んでいながら知らない人がいるということに私はとても大きなショックを受けた。

私と友人となぜ、こんなにも認識の違いが出てくるのだろうか。まず、私の通っていた小学校では一年をかけて総合学習で狩野川台風について学んだ。それはなによりも、その小学校から犠牲者が出た、ということが大きい。小学校の敷地の中に、犠牲になった生徒を弔う「みどりの子の像」がある。私たちはその像を見、学ぶことで、子供のうちから被害の大きさを知り、次の世代へと受けつないでいくためのバトンをもらっていたのだ。小さな頃

遊んでいた公園にも狩野川台風の慰霊碑があった。私たちは狩野川のそばに生きる者として、常に川の存在と、ひとたび災害が起こったときその川がいかに怖いものになるかを意識して暮らしてきた。

そのような自分の経験から、このような昔おこった自然災害は、子供たちに語りつなぎ、災害を知っている人を絶やさないことが大切なのだと思える。つながりはとても重要だ。知っているのと知らないのでは、もし災害がおこった時に被害の差が出てしまうかもしれない。

しかし災害で損害を受けた私の住んでいる町も、今は何事も無かったかのように穏やかで、水のライフラインにも困っていない。それをふくめ日本は、生活に関わる水には本当に困らない国だと思ってしまう。全ては先人から続く考えられないような努力と技術力だと思ってしまう。一杯の水も宝石のように輝いて見える。先人が命を削ってつくった水路から始まり、災害にあい水の怖さを知った人々、それを子供たちに話していった人々、そして今私たちが滞りなく水を使うために働いている人々……さまざまな人がバトンを渡してきたことを考えると私の水への思いも変わった。多くの人がこのバトンを受けついでほしいなと願う。

そして今、この作文を書いていたとき、窓をふと見ると、ゆるやかな流れの美しい狩野川が目に入った。私にも子供ができたなら、きっと狩野川台風について話すのだろうか、と思うとちよつと不思議な気持ちになった。

入選

水と人との深い関わり

三重県 高田中学校 一年 杉山 なつみ

今朝、玄関の植木鉢の花が少し元気のないことに気づき、急いで水をやってしばらくすると、また元氣を取り戻してきれいに咲いていました。水の力を感じた小さな出来事でした。私達も水がなくては生きていけません。五月に入り、緑がまぶしい季節になり、家の近くの田んぼには水が張られて田植えが始まりましたが、毎日食べているお米だって、水がなければ育たないのです。水は生命の源。水のおかげで私達はこうして生きていくことができます。

とは言え、水は蛇口をひねればいつでもどこだけでも出てきますし、飲み水だけでなく、お風呂やトイレなど、毎日当たり前のように使うことができます。あまりにも身近すぎるため、小さい頃はとくにその存在について考えることはありませんでした。でも、社会科の授業で水道施設の見学へ行って話を聞いたり、河川の役割を学んだり、また水質汚濁などの公害や水不足の被害について学ぶ中で、私が普段何気なく使っている水は自然からいただいているものであり、そして自然の恵みを守りつつ私たちが日々使えるようにするために、様々な人たちが関わっているということがわかり、こうやって水を使うことができることに感謝して、大切に使わなければならないと思うようになりました。

水のありがたみを感じる一方で、最近の新聞やテレビのニュースでは、大きな台風やゲリラ豪雨、土砂災害、河川の氾濫などによる水の恐ろしさを思い知らされることもあります。東日本大震災では津波の大きな被害もありました。水の力があまりにも大きすぎて恐怖を感じ、普段使っている水とは全く別物のような感覚になることもあります。ただこの自然の猛威の中には、人間による環境破壊が原因のものも多くあるのです。人間の様々な活動による二酸化炭素排出増加や森林伐採が原因とされる地球温暖化など、人間の都合で自然をどんどん脅かしてきたのです。今の地球の状態を知れば知るほど悲しくなりますが現実に向き合い、環境

を守るため、そして美しい自然を取り戻すために、世界中で努力を続けている人々がたくさんいます。私達も、ひとりひとりができることを少しずつでも取り組んでいくことが大切なのだと思います。

私は小学生の頃、環境について学ぶ子供向けの活動に何度か参加させてもらったことがあります。海岸清掃や、河川の水質調査、植樹や育樹活動なども体験させてもらいました。活動する人たちから話を聞いたり、詳しく教えていただいたりすることで環境についていろいろと知ることができました。小学生ができることなので簡単な活動だったと思うのですが、それでも朝から一日中活動に取り組むのは疲れましたし、大変なことでした。活動を通して感じたことは、人々は意識せずに環境破壊につながることをしてしまっているという無知の恐ろしさ、また、自然を破壊していくことは簡単ですがそれを元に戻そうとすることは本当に大変だということです。完全に元の状態にすることは不可能でしょうが、少しでも元の状態に近づけるためには、人々の努力はもろろんのこと、相当な時間とお金を要するのです。途方にくれてしまいそうですが、何もせずに放っておけば、どんどん悪化していきます。

中学生の私達にできることは何なのでしょう。まずは、知ること、そして伝えることが大事なのだと思います。そして一番大切なことは、行動に移すことです。一人ひとりの活動は小さなものでも、その努力が積み重なっていけば、やがて大きな進歩につながる可能性があるのです。自分にできることを考えて行動し、水の恵みに感謝して、日々水を守り続けてくださっている方々への感謝の気持ちを忘れずに、これからも大切に水を使っていきたいと思います。

入選

「生命を育む水を大切にしよう」

三重県 高田中学校 二年 前田 あずみ

「澄みきった青い空、透きとおった清らかな水・・・。」そう安曇野の美しい風景を思い浮かべて語る母。

そんな心の清らかな子に育ってほしいと、願いを込めてつけてくれた私の名前。

そこで、私の名前の由来となった安曇野について調べてみようと思った。

安曇野は「湧水の郷」である。北アルプスの雪解け水は伏流水となつて湧き出し、その豊富な湧水が安曇野に恵みをもたらす。安曇野の湧水は日に70万トンの湧出量があり、水温は年平均13度ほど、真夏でも15度を超えることはないそうだ。大正期以降、その冷たく清らかで豊富な湧水を利用してわさびの栽培が盛んになり、現在ではわさび田の総面積は70haほどにも及ぶという。長野県はわさび生産量日本一を誇るが、その90%以上が安曇野産だそうだ。わさびの栽培の他、水道水やニジマスの養殖にも湧水は用いられ、さらには精密機械工業の分野にも用途が広がる。

まさに「湧水の郷」である。

なんて魅力あふれる土地なのだろう。

私は小さい頃から毎年夏には鈴鹿の小岐須溪谷へ川遊びに行っている。その川は木々に囲まれ、大きなゴツゴツとした岩場を流れ、浅瀬もあり、よくおたまじやくしや魚を捕まえて遊ぶ最高に素敵な場所だ。

私にとって水は大切な飲み水であると同時に心身ともに癒されるものである。

川のせせらぎ、滝の音、また水のある風景を見てリラックスしたりする。

このように素晴らしい場所が全国各地にたくさんある。この懐かしい風景を後世にのこせるようにしたい。美しいと心が震えるような感動を

いつまでも感じていたい。

しかしながら現在、森や海の環境の多くは貴重な野生動植物が息づいていると同時に深刻な破壊の危機にさらされている。

また淡水生態系も世界の各地で劣化や消失が進んでいるという。

いま世界の多くの国々では水不足と、日々の生活や工場から出る汚れた水によって、地下水や河川が汚染されつつあることが問題になっている。

川や海の水を汚しているのは、工場や田畑から流れてくる水や、家庭から流される生活排水が原因である。生活排水の汚れを少しでも減らすためには一人一人の意識が変わることが大切だ。蛇口をひねれば当たり前のように出てくる水にありがたみの気持ちを忘れてはいけない。

ニュージーランドの南島にあるミルフォードサウンドへ向かうバスに乗っていると、途中でバスが停まり、乗客に紙コップを渡して湖の水をすくって飲むようにすすめられて驚いたことを以前母から聞いた。その湖の水は透き通って冷たくとてもおいしかったそうだ。

地球上には神秘的で未知なる世界がたくさんある。まだ見たことのない素晴らしい自然をすさまじい勢いで破壊していくのは人間達なのだ。

その一方で、自然環境を守るために調査し、防ぐ方法を考えることができるのも我々人間なのである。

私達はすべての生き物といっしょに自然環境の中に生きている。

まずは身近なところから自然を大切にして環境を整えていける心がけよう。

あの青く美しく澄み渡る空のように、清らかに流れる透き通った水のような純粹な心の輪が広がってゆくよう声をかけ合おう。

大切な自然の恵みである水をこの先もずっと守るために。

入選

自分たちの力で琵琶湖を守る

滋賀県 大津市日吉中学校 3年 佐野 翼

滋賀県大津市、日本で最も大きい湖、琵琶湖と隣接するこの街に私は住んでいる。いつでも側には山と琵琶湖があり、街には自然がたくさん残っている。しかし、滋賀県の観光資源でもある琵琶湖は、とてもきれいと見えるものではない。

「汚っ！」これは、私が所属している日吉中学校の生徒会執行部が「雄琴ヨシ刈り」の活動中、メンバーの一人が思わず口走ってしまった言葉である。そう思うのも無理はなかった。

ヨシの群生林のそばの湖岸には、不法投棄された無数のごみ、打ち上げられた大量の魚の死骸、沖から流されてきたと思われる数々の草や藻。これらが絡み合い、何かわからないほどのごみの山をつくりあげていた。また、この活動の一環で行った「フナの放流」の際も、活動に参加していた小学生の子どもたちが湖岸に近づくと、「くさっ！」や「きたなっ！」と言っている声はずっと聞こえていた。琵琶湖はこんなに汚くてよいのだろうか？と不安になった。

ところで、私は、小学校六年生のころから、葛川少年自然の家という自然体験施設で、キャンプボランティアとして活動している。琵琶湖から標高約220メートルの高さに位置し、安曇川の上流にあたるこの場所、初めて水と触れあったときは驚きの連続だった。まず、川を見てもみると、川底まで透き通るほど透明度の高い水。これには、「なんてきれいな水なんだろう。」とあまりの美しさに感動した。さらに、手を水の中に入れてみると、体の芯まで染み渡るような冷たさ。これにも「八月なのに…」と驚きの連続だった。しかし、それと同時に、「上流ではこんなにきれいな水なのに、琵琶湖に流れていくと、人間の手によってあんなにも汚れてしまうのか…」と、思った。

私がこの二つの体験を通して考えたことは、人は、自分たちの手で、自分たちの生きる資源である水をいつのまにか汚しているということだ

ある。

上流では、そのまま飲むこともできるほどきれいな水を、人間が、ごみなどをむやみに投棄することによって、汚濁してしまっている。

汚された琵琶湖の水の臭いで、住みにくくなる人が出てしまったり、琵琶湖に住む様々な生き物が死んでしまったり、減少したりする可能性が高くなってしまふ。

「このままではいけない！」と考えた私は、生徒会のメンバーとともに、琵琶湖の保全活動の強化に努めた。今までも、生徒会では「雄琴ヨシ刈り」と「下阪本クリーン作戦」という二つの活動に積極的に参加してきた。しかし、参加してくれる人が少ないというのが現状だった。

そこで、私たちは、それらの行動のPR活動の強化に取り組んだ。そうすることで、多くの人に、琵琶湖の保全に対する意識をより高めてもらえると考えたからである。具体的には、それらの行事への参加を呼びかけるポスターを作成し、学校の中に掲示したり、放送で呼び掛けたりするといった取り組みを行った。その結果、少しずつだが活動に参加してもらえるようになった。中には部活動単位で参加する人も増えてきた。ユニフォーム姿でごみを拾ったりする姿は、とても頼もしく見えた。

このように、少しでも自分の周りの環境を良くするという意識が高まれば、それが、琵琶湖の水質改善に繋がる。そのためにも、今私たちが行っている活動が少しでも環境改善につながればと思い、これからも頑張っていきたいと思う。

入選

私の水琴窟

京都府 京都学園中学校 三年 前田 葵

「水琴窟」は手水鉢などの地下に、底に小さな穴を開けた甕を逆さに埋め、手を洗って流れる水がしずくとなって落ちるように作られたものです。伏せた甕の底に溜まった水面に落ちる水滴の音が甕の空洞で共鳴し、琴の音に似た美しい音を響かせます。そのルーツは、江戸時代にまでさかのぼるそうです。

私が初めて、水琴窟を知ったのは、小学生の時、京都市植物園でのことです。土の中はかなり深く埋められているのか、音は長い竹筒を通してしか聞くことができせん。でも、「カーン」というその音は、今でも忘れられないくらいきれいな音でした。例えばお風呂場で響くような「ポチャン」という音だと思っていたのに、鉄琴のような高音が聞こえてきた時は、本当に感動しました。次々に流れ落ちていく水も、水琴窟の中では、一音一音がはつきりと鳴り響きます。それはずっと聞いていたような、居心地の良い音色でした。

先日、インターネットで「水琴窟は自分で作ることができる」という記事を見つけ私は祖父の家の庭を借りて、自分の水琴窟を作ってみることにしました。

作り方は、まず、大きい甕か壺を用意し、それが埋まるよう土を深く掘り、その底に砂利をします。次に甕を埋め、音を外に出すための竹筒をはさみながら二枚の木の板でふたをし、すき間を玉石でふさぎ、完成です。でも、私は祖父の家に口がすぼまった大きな茶壺があったので、それを使わせてもらうことにしました。すでに口が狭いので、砂利をしいた土に埋めるだけの簡単な作業になりました。ドキドキしながら水を垂らすと、私の水琴窟は、祇園祭のおはやしの鉦のような、きれいな高音を響かせてくれました。

水琴窟の音を聞いていて、ふと思ったのは私は普段、水の一滴一滴を意識することがない、ということでした。いつも飲むペットボトルは5

00ml、毎日入るお風呂の水は200l。一滴を意識してみると、いつも何気なく使っている水は、とてつもない量だと気づきます。

水を大切にしなければならぬことは誰もがよくわかっているけれど、行動することはなかなか難しいのかもしれないかもしれません。私は歯みがきや洗顔の時などに水を流しっぱなしにしないこと、シャワーを使う時間をなるべく短くすることに気をつけていますが、必要以上に使ってしまうこともあります。なぜなら、自分のやっていることは小さすぎて、全体に影響しないのではと思い、気がゆるんでしまうからです。しかし、水琴窟の音を聞き、水の一滴一滴を思い、改めて気をつけようと思いました。

他にも、水を守るために、中学生の私たちにでもできそうなことを探してみました。環境省の生活排水のページに、何気なく流したものがどれだけ川や海を汚すか、という資料が載せられています。マヨネーズ大さじ一杯で汚れた水を魚がすめる水質にするには、300lのバスタブ13杯の水が必要であるということです。肉じゃがの煮汁100mlはバスタブ3.3杯分など、私にも身に覚えがある例が挙げられています。それを見て、自分が想像以上に水を汚していることを知りました。しかし、逆に言えば、食事を残さずきれいに食べるだけでも、バスタブ何杯分の水を無駄にしないだけの貢献ができるということになります。

私の水琴窟にたれ落ちる一滴一滴の音は、いつでも私に、水の大切さや有難さを思い出させてくれます。そして、私がしているちよつとした節水も、大きな、大事なことだと勇気づけてくれます。自分の使う水、捨てる水に責任を持ち、きれいな水をずっと守っていききたいです。

入選

私と母のクリーン作戦

大阪府 高槻中学校 二年 矢野 七海

三月のある日曜日の朝、私は淀川の河川敷にいた。期末考査の期間中だというのに、両手に軍手をはめ、右手には火ばさみを持っている。なぜ私がここにいるのかというと、話は数日前にさかのぼる。

「ねえ、町の広報に桂川流域クリーン大作戦というのが載っているの。週末にあるんだって。近いし一緒に行ってみない？」

またか……。私はいつも母の思いつきの提案に巻き込まれてしまう。テスト勉強があるので乗り気ではなかったが、母に押し切られる形で私もクリーン大作戦に参加することになった。

私の住む島本町は、桂川・宇治川・木津川の三川が合流し淀川となる場所で、広い河川敷がある。今回のクリーン作戦は、京都府の桂川流域二十三か所で一斉に行う河川美化活動のひとつで、私たちは町内の河川敷を清掃することだった。この活動は、淀川水系一斉美化アクションというさらに広域の清掃活動の一部にもなっているらしい。

雲ひとつない空、快晴だ。しぶしぶ参加した私ではあるが、空の青と河川敷の緑、まっさらな軍手の白が新鮮で心地よく感じた。集まったのは、お年寄り、おじさん、おばさん、幼稚園児くらいの女の子とその親など幅広い世代だ。そして、クリーン作戦を取り仕切るのは、町役場の方かと思いきや、関西大学の大学生だった。彼らは大学のサークルのメンバーで、河川レンジャーを務めているのだという。

私は、河川レンジャーという言葉をこの時初めて耳にした。住民と行政がともに川づくりをすすめるようコーディネートすることが、河川レンジャーの役割なのだそう。多くの人に、川にふれ、川のことを考えてもらえるよう、様々な活動をしているという。

河川レンジャーの方からごみ袋を受け取り、河川敷を歩いてまわった。たばこの吸い殻、空き缶、空き瓶、段ボール、大きなスポンジ、食べ物の容器や袋、発泡スチロール。すぐに大きなごみ袋はいっぱいになった。

二時間あまりの間に、母と合わせて七袋分のごみを集めた。ほかの人の集めたごみの中には、タイヤやモーターなどの大きなものもあった。一番気になったのは、数えきれないくらいのおたばこの吸い殻だ。河川敷には、風で飛んでくるものもあると思うが、吸い殻は人が捨てたものに違いない。小さな吸い殻を火ばさみでひたすらつまんで、ごみ袋に入れる。私は、こんな気持ちの良い河川敷に、どんな気持ちでたばこを捨てるのだろう、と疑問に思った。

私の家はマンションの六階で、ベランダからちようど淀川が見える。いつも眺めている風景の中に、こんなにも多くのごみが隠れていたことに驚いた。ごみを拾っている間は、知らない場所を歩いているようにも感じた。ごみを捨てる人がいなければ、ごみを拾わなくてもいいのにと少し悲しい気持ちになった。

私たち人間は、水がなくては生きていけない。淀川の水は、私の生活に不可欠な大切な資源だ。河川敷の環境を守ることは、淀川の水を守ることにつながっているにちがいない。

今回のクリーン作戦を通して、河川敷には多くのごみが捨てられていること、そして河川レンジャーや地域のボランティアなど多くの方が、河川敷の美化に関わっていることを知った。川の環境と私たちの水を守るこの活動は、もっと広く知られるべきだろう。多くの方々の努力のおかげで、私たちはきれいな水を利用できていることを自覚し、感謝しなくてはならない。

普段、何気なく使う水は、あつて当たり前の水ではない。出しゃばなしにしてしまっている水にも、たくさんのお人の思いがまつている。これからは、水を大切に使うことを意識するとともに、水辺の環境を守る活動にも積極的に参加していきたいと思った。

入選

日本の水技術を世界へ

兵庫県 滝川第二中学校 三年 浅見 美裕

私の母の実家は、兵庫県の田舎で、川の近くにありますが。毎年台風の季節になるとテレビでよく見る洪水に、今まで二度あったことがあるそうです。祖父の家は、建ってから二十年経っていませんが、きれいな納屋の白い壁にうっすら洪水の水がきた跡の茶色い線が残っていて、こんな高さまで川の水がきたのかと、初めて見た時びっくりしました。

もともと、家を建てる時に、今までの洪水の高さを考えて、土を盛って、目前の田より道路より土地を上げて、家を建てました。ですが、平成二十一年佐用町にも大きな被害を出し、死者も出たあの台風九号の時に、近くを流れる千種川が氾濫し、床上浸水したのを私も覚えていて、私はまだ小さかったけれど、きれいだっただ庭の苔や砂利が全て茶色い泥でおおわれ、家の中は全て畳が上げられて床下が見え、ふすまやしうじも外されていて、いつものきれいな祖父の家ではなくなっていたので、とても悲しかったことを覚えています。母も祖父も祖母も、水を流して床をみがいったり、食器棚の中のを全て出したり、コンクリートをたわしでこすったり、全てもとに戻るまでにすごく日数がかかりました。建てて新しかった家がそんなことになり、祖父は悲しんでいましたが、それでも、

「家は元に戻るし、そうじすればきれいになるけれど、佐用の方は人が亡くなっていてまだご遺体も見つかっていない。早く見つかってくれたらいいな」と言っていました。川はこわいなと、その時思いました。

それからしばらくして、川の工事が始まりました。同じような洪水をおこさないように橋を立て替え、川底の土や砂を掘って深くし、川岸の護岸工事を行ったのです。祖父たち住民も、町も、県も、それを願い、数年かかって川の広い地域にわたる改修工事が完成しました。昔ながらの土手の景色やすすきの河原はなくなってしまうけれど、そのかわり、

安全な暮らしが手に入ったんだと感じました。

水は、わたしたちの生活に、命になくてはならないものです。ですが、一歩まちがえば人の命や生活を奪う恐ろしいものだとなりました。川には様々な役割があります。川から私たちの飲用水が作られるし、田畑の作物になくはならないもの、そして、海から雨になり森林を潤し、山の恵みを海に運び、ふたたび海に還る流れが、川です。川を大切にしながらも、川と上手につきあい、私たちの暮らしと自然とのバランスをとりながら、人間が発展していくべきだと考えます。

祖父の家の洪水被害をきっかけに、私は、ニュースでも川や水について興味をもつようになりました。日本は川がたくさんあり、水に全く困っていないこと、川がきれいで水質改善の必要がほとんどない飲用の水が多く地域で供給されていることをうれしくもあり、それが普通だとも思っていました。しかし、世界では、水不足が深刻化し、毎年百八十万人の子どもが不衛生な水が原因で命を落としていると知りました。蛇口をひねればどこでも安全な水が飲める日本の経験と技術が非常に有益な国際援助活動だと言えるでしょう。人の命を救う、このことが一番大切ですが、その上、女性の社会進出や子どももの就業が進みます。水問題で苦しむ発展途上国では、水汲みは子どもや女性の役割であり、その仕事に学習する時間や社会に出て働く時間を奪われています。また、上水道施設、下水処理を整えれば、水の価格は適正な水準になり、水を汲みに行くよりも水道料金を払う方が安くなり、人々の暮らしの水準は向上し、安全で豊かな生活を送れると確信します。

水と上手につきあい、水の豊かな恵みを享受し、水の恐ろしさと直面してきた日本だからこそその水技術を世界へ、と願います。

入選

水を大切にする理由

兵庫県 滝川第二中学校 三年 森口 夏海

「水を大切にしましょう。」

物心ついたときから、親や学校の先生に何度言われてきたかわからないこの言葉。これまで私はただ何となく、「水は無駄に使ってはいけないものだ」という常識に基づき、節水を意識して毎日を過ごしていました。

しかし、「なぜ」水を大切にしなければならぬのかを考えたことはありませんでした。環境のため、地球のため、というのは、何となく想像がついていましたが、具体的にどのような利点があるのかまではよく分からなかったのです。

先日、近くの浄水場を見学する機会がありました。私はそこで、水の歴史や水が私たちの生活と如何に密接に結びついているかなど多くの事を学び、改めて水の大切さに気づくことができました。それと同時に、ある一つの疑問が浮かんだのです。私はその日、汚れた水をきれいにする過程を実際に見ました。

「水は汚れても、現代の技術があればまたきれいになる。水は自然の循環を繰り返しているし、地球上の水の量が減るわけでもない。それなら、なぜ節水が必要だと叫ばれるのだろうか。」

私はここでようやく、水を大切にしなければならない理由を考えるようになりました。

家に帰るまでに自分なりに少し考えてみました。節水してきれいにしなければならぬ水の量が減れば、浄水場や下水処理場での機械作動の省エネになる。私たちの水道料金への負担が軽くなる。しかし私には、このような間接的な利点しか思いつくことができませんでした。

そこで私は、家に帰ってパソコンを開きました。インターネットを利用して、節水の環境への直接的な利点を調べたのです。私の考えと同じように、節電につながるから、家計に良いから、と書いてあるものもありました。その中で、ある一文が目が止まりました。

「たしかに水は限りない。海に行けば、いくらでも水はある。しかし、『資源』としての水は無限ではない。有限なのだ。」

これを見て、私ははっとしました。人間の手、浄水場や下水処理場が機能しなくなれば、『資源』としての水は得られなくなります。私たちが、水を『資源』としての水として得るまでには、想像できないほど莫大なコストとエネルギーが消費されています。

これを基に考えれば、答えはすぐに見つかりました。節水する、水を大切にする、汚さない、ということが、結果的に環境や地球を守ることにつながっていたのです。間接的にでも、エネルギーを省くことはめぐりめぐって環境のためになると気づくことができました。

これまでただ何となく節水はしていましたが、振り返るとまだまだできることはあるように思います。私は「なぜ」節水が必要なのかを考えることで、改めて水の大切さに気づき、意識的に環境を守ろうと思うようになりました。以前福祉活動で節水を呼びかけていたとき、小学校低学年の子に何度言っても伝わらず、困ったことがありました。しかし今になって、それは「なぜ」を説明していなかったからだと思ってきました。塵も積もれば山となるように、一人一人が心がければ環境は守られます。これから節水や水の大切さを人に伝えていくとき、私はただひたすらに「水を大切にしましょう」と呼びかけるのではなく、「なぜ」それが必要なかを説明しようと思えました。『資源』としての水を使う全ての人が水について深く考え、環境を守ろうとする姿勢を確立していくことが、今後の私の大きな目標です。

入選

水を立体的にとらえる

岡山県 吉備中学校 三年 稲田 知陽

水という言葉聞いて、みなさんは何を思い浮かべるだろうか。

水道の蛇口から出てくる水。水洗トイレ。お風呂。プール。ミネラルウォーターという人も多いだろう。水は私達の生活に欠かせない存在だ。

一方で、これらのイメージはあまりにも均一的で平面的だと思う。水とは本来私達にとって、もっと広く、大きく、深い存在ではないのだろうか。そこで私は、三つの視点から水を多角的、立体的に捉えてみたい。

一つ目は、水と現代の生活とのつながりだ。先ほど挙げた水が、どうやって私達の手元に届くのか、その背景を想像してほしい。

雨や雪が降り、山々に蓄えられる。自然の力で濾過され、川のせせらぎとなり、浄水場へ。世界で「おいしい。」と評価される日本の水は、こうして生まれる。だから水を大切にすることは、山や川を大切にすることにつながるのだ。逆に水を粗末に扱うことは自然の恵みに背くことだといえよう。

地球上には、地形や気候、不安定な政情や貧困などの影響で、安全な飲み水の確保が難しい地域が多くある。私達も明日はその立場になるかもしれない。だからこそ、今、丁寧に水とつきあっていく必要があるのではないか。

二つ目は、水の移動ルートである川に注目したい。私の祖父は、以前市役所で都市計画に携わっていた。その祖父の口癖が、「都市を造るときには、最初に治水をせんといいけん。道路整備はその次じゃ。」だ。今の自分の生活を考えると、通学するのも、買い物に行くのも、道路を利用している。一方、川の存在感は乏しい。暗渠になっている場所も多く、その流れを目にすることも少なくなってしまった。しかし、私の認識は体験を通して大きく変わった。

私は昨年八月に、国土交通省岡山河川事務所で社会体験をさせていただいた。巨大なパネルに色鮮やかな表示がまぶしい。災害対策本部では、

精密な機械と所員の方々の不断の努力で、二十四時間私達の生活が守られていることを実感した。百間川河口水門の視察では、大正・昭和・平成と三つの時代に造られた水門を同時に見ることができ、とても迫力を感じた。また、「旭川のまちづくり」のプレゼンテーションでは、私達の生活に寄り添った河川計画が立てられていることが分かり、感動した。この体験を通して、私は祖父の言う「治水の大切さ」が身にしみて分かった。私達の生活において、河川がどれほど重要な役割を果たしているか、またその管理がどれほど厳重になされているか、私達の安全を支える背景を学ぶことができた。

三つ目は、過去から未来へという視点だ。温故知新という言葉もある。水がもつと切実感をもって大切にされ、川が生活に密接に関わっていた頃の暮らしから学べることはないだろうか。

その学びを具体化した設備が岡山にはある。市中心部を流れる西川の兩岸に造られた「西川緑道公園」だ。ここは外国人観光客にも、とても人気がある場所だ。水車が回り、六月には蛍が飛び交う。また近くにはおいしい「おかやまの水」が飲める設備もある。この緑道公園を歩く人の表情は、みな穏やかで優しい。水と緑にその力があるのだと思う。

そこで私は提案したい。日本を「水の国」とし、インバウンドするのだ。外国の方々が日本に来て、各地でおいしい水を飲み、料理に舌鼓を打つ。美しく安全な溪流をめ、日本文化を体験する。「水」というキーワードで、日本の魅力を世界に発信できたらどんなにすてきだろう。

水を立体的にとらえることによりさまざまな問題を考えることができた。よりよい未来に向けて、これからも水を大切にしたい。

入選

お茶の甘さ

「水って限られた資源なんだね。」二歳離れた妹が宿題をしていた時につぶやきました。限られた資源。正直なところ頭では分かるけれど、実感は全くありません。水道の蛇口をひねれば水は出るし、コンビニエンスストアに行けばいろんな種類の水がペットボトルで売られているので、どうしても水に限りがあるとは思えません。でも、妹のつぶやきをきっかけに、そう考えるのは、水があることが当たり前だと思いついてからではないかと思いはじめました。これを機会に水について私なりに調べてみることにしました。

図書館で調べてみると実は徳島県は隠れた名水どころで、吉野川を始め、鮎喰川、穴吹川、海部川、そして私の住む阿南市を流れる那賀川といった河川が数多くあり、徳島県全てが水の宝庫であり、特に徳島市の中心部にある眉山からは湧水が出るということでした。町の中心部から湧水が出るのはとても珍しく、水質もよく人気スポーツにもなっているように資料で調べると眉山周辺には、錦竜水・鳳翔水など九つの湧き水があるそうです。特に錦竜水はロープウェイの乗り場近くにあるというので、早速家族で訪ねてみました。

寺町へ入ってしばらく歩くと、屋根もついていて立派な「水汲み場」と説明の看板がありました。江戸時代から名水として有名だそうです。家で沸かして飲んでみました。「いつものお茶より甘い。」というのが私も含めた家族の感想です。まるやかで優しいホッとするようなお茶は、私の身体全体にしみこむような気がしました。徳島の水資源の豊かさを改めて感じて、私はとても誇らしく思いました。そんな体験をすると、水に限りがあるとは、なおさら思えなくなっていました。

しかし最近では徳島でも、河川が氾濫し全国ニュースで流れるくらいの大洪水が発生する反面、梅雨入りが発表されても雨が降らず四国のダムで取水制限に踏み切ることがあったりするので、徳島も水から「恵み」

徳島県 那賀川中学校 二年 松尾 つばさ

だけをもらっているのではないような気がします。

先日、夕食をとりながら「水」について話してみました。祖父が腕を組んで「みんなは水のことといえば飲み水や雨のことをすぐに思い浮かべるけど、雪や氷も水からできてきているだろう。」と言ってくれました。続けて、水の使用に関するトラブルは水の使用量が増える夏場だけでなく「断水」などは冬場も起こること、以前断水が起こって困った時に給水してくれ、お風呂の入浴券を配布などの対応してくれたことなどを話してくれました。阿南市には給水車があることもわかりました。平成十四年に購入した給水車は二千ℓのタンクを積載し、約二十五mの高さまで給水が可能だそうです。祖父はお風呂の水や水道の出しっぱなしを厳しく注意します。今まではなぜそんなに強い口調で注意するのだろうかと感じた時もありましたが、「蛇口をひねれば水が出るありがたさを忘れるな。」という口癖の向こうにはそういった過去の体験があったのだということを知ることができました。

私の通う中学校の校訓は「いのちを大切に」です。私はこの校訓が大好きです。私たちが生きていく上で「水」は欠かすことができない存在です。それは誰でも知っています。「いのちを大切に」するためには、その命を育み、支える「水資源」を大切にすることをずっと真剣に考える時期が来ているように思います。地球温暖化が進み、少しずつですが環境の変化を確実に感じ始めている今、「蛇口をひねれば出るありがたさ」に感謝することから私は始めたいと思います。

上勝町や日和佐、那賀町などにも有名な湧水があるそうです。夏休みを利用して今度は妹や祖父と一緒に訪ねてみたいと思っています。まず、自分で実際に五感で感じ、「知ること」「体験すること」が「守ること」の土台になると私は信じています。

入選

吉野川と共に生きる

徳島県 吉野中学校 三年 出口 莉子

「水を買って飲むのは、ここらでは考えられんなあ。」
祖母はそう言うと、蛇口から流れる水をコップに注ぎ、ゴクゴクと飲む。

自宅から自転車で五分ほどの距離に、祖母の家がある。その少し先の土手を登ると、広大な吉野川の景色が突如目に飛び込んでくる。私の住む吉野町は、名前の通り、吉野川の下流域にある小さな農村地帯だ。

吉野川は、高知県を最源流とし、徳島平野を西から東に流れ、延長百九十四キロメートルにも及ぶ一級河川の清流だ。その大河を横断する全長一・一五キロメートルの柿原堰は、町のシンボルである。

大正時代に、洪水時の水流の軽減や飲料水、主に農業用水の取水堰として建設され、豊かな農作物を育む源となっている。堰の上流と下流では、水面の高さが五メートルも違い、そこを登ろうとする鮎をねらうサギや鳥達。又、鮎の解禁日には、たくさんのカンドリ舟と釣り人でにぎわいを見せる。カンドリ舟とは、まだ橋の少ない時代に渡し舟として使われ、時代劇でよく見る舟の形をしている。戦後、初めて架かったとされる阿波中央橋を背に、夕日に照らされる柿原堰は、黄金色に輝き、水面に揺れるカンドリ舟のシルエットの幻想的な美しさに思わず、江戸時代にタイムスリップしたような気持ちになる。

私の中で、吉野川は、そんな穏やかで美しいイメージしかない。

しかし、利根川の板東太郎、筑後川の筑紫次郎と共に四国三郎の異名を持つ、日本三大暴れ川のひとつだ。

吉野川の歴史は、洪水の歴史。

千年以上の昔から日本一の洪水地帯といわれ、たくさんの命が失われた事をつい最近、祖母から教わった。

祖母は幼い頃、隣町の上板町に住んでいた。台風一過の午後、堤防決壊の危険を知らせる半鐘の音に、両親と共に避難所まで、水の恐怖と戦いながら、走りに走ったそうだ。気がつくくと、そこには人間だけでなく、

家族同様に連れて来た、牛や犬達の叫びにも似た鳴き声が響き渡り、まるで地獄絵さながらだったそうだ。

架けても架けても流される橋、収穫前に泥水に浸かる農作物。浸水する家屋。その苦悩は、ダムの建設や堤防工事によって、日々、解消されているようだ。私達が今、見ている吉野川は、災害で亡くなられた人々の犠牲や工事に携わった、たくさんの方々の血のにじむような苦勞と努力によって、美しく保たれている。

私が通う吉野中学校は、「アドプトプログラム吉野川」というボランティア活動に参加している。「アドプト」とは、「養子縁組」という意味をもち、吉野川の土手や河川敷を養子にみたくて、流域に住む人々が我が子のように愛情をもって面倒をみるという清掃美化活動である。年々、参加する企業やグループが増え、大切な川を守る原動力となっている。

この活動を通して、私達の大切な川は、私達の手で守っていきたいと思うようになった。さまざまな水の恩恵を受け、この川に生かされていると気づいたからだ。そして、吉野川の開発と発展を願う先人達の思いを胸に刻み、私達も又、未来につなげていこうと思う。

入選

節水チャレンジ

香川県 高松市立龍雲中学校 二年 長尾 拓実

妹の夏休みの宿題で「節水チャレンジ」というプロジェクトがあったので、家族みんなで協力をしました。

方法は七月二十五日、八月一日、八月八日の三回、同じ時間に水道メーターをチェックするというものです。七月二十五日から三十一日までの最初の一週間は普段どおりに生活して、次の八月一日から七日の一週間はチャレンジウィークとして節水をして過ごし、どれだけ節水ができるかというものです。

母はまず、洗面台や風呂場の入り口に「蛇口をひねる量を考える」とか、「出しっ放しに注意」とか「節水中」と書いた貼り紙を貼って水を無駄にしない様に注意をする工夫をしました。

僕は初日や二日目は、水を大切にしようとして張り切って、歯磨きやうがいの際にはコップを使い、シャワーの時には、水を出しっ放しにしないように心がけました。また、シャワーの時にはお湯になるまでの水をバケツに溜めて部活で泥だらけになった体操服やソックスの下洗いに使うなど、今までのことがない色々な工夫をしながら楽しんで節水に取り組みました。

しかし、何日か経つと、節水をしていることを忘れてしまったり、貼り紙を無視して、勢いよく水道の蛇口をひねったり、水を出しっ放しにしていることを家族に注意され始めました。そして、そのうちに「面倒くさいな」「なんで、こんなプロジェクトを行っているのだろうか？」という疑問も自分の頭の中で芽生えてしまうこともしばしばありました。そんな時、お父さんが新聞を読みながら、

「今年も早明浦ダムの水が減って五十%台になっている。」

と言いました。それを聞いて僕は小学生の時に習った、香川県は雨の降る量が少ないからため池が多いこと、それを解消するために早明浦ダムから香川用水を作ったということや、

「昔、高松では水不足で給水車が来て、水を配っていたことがある。」という話を祖父から聞かされたことを思い出しました。僕も新聞を見ると、早明浦ダム貯水率として平年値や前日比と比べられるように載っていて、下に「香川用水取水制限中。節水にご協力を」と書かれています。

僕はハッと目が覚めたような気がしました。節水は、無駄な水を無くすことで、それを多くの人が意識して取り組めば大きな効果につながるということに改めて気付きました。「僕ももう一度頑張ろう」と思い、また節水を心がけるようになりました。今度は出しっ放しをなくしただけでなく、「今、使う分だけ」、「今、必要な分だけ」という様に、必要最低限の水しか使わないようにしました。また、母はお米を洗った水を食器の下洗いに使ったり、お風呂の残り湯を洗濯に使ったり、すぎが一回ですむ洗剤を使ったりしていたそうです。

その結果、たった一週間の「節水チャレンジ」でなんと、約千九百四十リットルも節水できました。この結果からぼくは、「無駄に出していた水がこんなに多く、こんなに節水出来るのか。」と驚きました。また同時に、「忘れずにずっと節水を心がけていたらもつとたくさん節水出来ただろう。」とか、「これからも続けられたらいいな。」と思いました。

今回の節水チャレンジでは、節水というのは水不足になりやすい香川に住んでいるからこそ大切であり、身近で感じられやすいと気付くことができました。香川に住んでいる以上、貴重な水を大切にし、さらには意識をしないでなくても自然に節水できている人になっていけるようにしていきたいと思いました。

入選

私達が守る命の源

熊本県

熊本大学教育学部附属中学校

二年

廣岡

里奈

火星には、水の流れた跡がある。内部には北海道四個分の水があると言われている。未来の地球に人間が住めなくなると予測した研究者達は、第二の地球として火星に注目している。他の惑星ではなく火星が選ばれたのは、全ての命の源である「水」の存在が確認されたからだ。「水は命の源」私にもそれを強く感じさせた、まだ新しい記憶がある。

私の住んでいる熊本県では、平成二十八年四月に熊本地震が起きた。熊本県は多くの被害を受け、私も被災者になった。蛇口をひねっても水が出てこない。私の家も何日も断水した。普段あまりにも当たり前に身近にある水がない。洗濯、トイレ、お風呂そして飲食も満足にできないという状況に、非常に不安になり、命の危険を感じた。水を求めて、私達は近くの店を回ったが、既にどこも水はなかった。二時間以上並んだ給水車でも水は手に入らなかった。

家の中のあらゆる水がなくなった頃、知り合いの農家の方に、湧水を分けて頂ける事になった。熊本市中心部からそう遠くない、普段なら流れていても目につかない水路の脇。そこから、一点の濁りもない透き通った水がこんこんと湧き出ている。太陽の光を浴びて、きらきらと輝くその水を見ると、それまでの緊張も不安も自然と消えていった。嬉しさが心から込み上げてくる。私達はペットボトルに入るだけの水を汲ませてもらった。春の温かい陽気の中で、その水を手をつけてみると、ひんやりと冷たく心地良い。飲んでみると甘い味がした。地震の後久しぶりに、私はとても安心する事ができた。震災以前から、近所の方はその湧水を使用されていたそうだ。

家に持ち帰った水を、私達は工夫して使った。コップ一杯の水で手を洗ったり、タオルを濡らして顔を拭いたり。電気が復旧してからは、電気ポットとやかんに水を入れて沸かし少しずつ湯船のために、浅い風呂に交代で入った。残り湯は、トイレを流す事に使用した。しかし、どん

なに工夫して使っても頂いた水には限りがあり、不安な状況が続いた。

翌日、前の家のおじいちゃんが「電気がきて井戸水が汲めるようになったけん、自由に使つてよかですよ。」と声をかけてくださった。初めて飲んだ井戸水は、普段飲んでいる水道水よりもおいしく感じた。水を分けてくれる周りの方々がいたから、断水を無事乗り越える事ができた。

熊本地震で、私は水の大切さを身に染みて感じ、本気の節水を経験した。それまで口では「節水しよう」などと言いつつも、どこか他人事だった。節水は本気になれば誰でもできる。やるかやらないかだ。私は自分ができる小さな節水から、意識して取り組むようになった。また、私達を助けてくれた、湧水や井戸水を育む環境の重要性を感じた。

被災者を救ったのは井戸水と言われている。そしてその井戸水や湧水を生活に使用できたのは、豊かな水を育てる環境があったからだ。この湧水でも飲めるわけではない。熊本の水がもし水質汚染されており、水量が少なければ、たくさん被災者を助けられなかった。

熊本には水を育てる環境がある。森林は雨水を根や土で長い年月をかけて、ろ過してくれる。水田は水を蓄えてくれる。そうしてできた水は、ミネラルが豊富で、私達の誇りだ。

私達人間は水がないと生きられない。他の生物も同じだ。地球の源は水なのだ。

正直、火星の研究には今は興味がない。まずは自分にできる事を少しでも実行して、この熊本の、この地球の環境を守ろうとする気持ちが大切だと思う。一人一人が小さな節水を心がけ、未来にも同じ環境を残すべきだ。

あの美しい湧水、おいしい井戸水、人の温かさ、誰もが安心できる未来。百年後も同じ水を飲める環境が、全ての生命に幸福をもたらすと信じている。

入選

未来の水へ、私達にできること

熊本県 真和中学校 一年 橋本 咲喜

「ああ、疲れたなあ。癒されたい。」

そう思うと、私は必ず決まってしまう場所があります。それは江津湖です。江津湖は、熊本県中部、熊本市南東部にある湖で、周囲約六キロメートル、面積約五十ヘクタール、最大水深二・六メートルのひょうたん形をした湖です。江津湖は、上江津湖と下江津湖に分かれています。四季に関係なく、年間水温が十九度から二十度に保たれています。

私は江津湖で水遊びをするのが好きで、底から水の大切さや、ありがたさを知り、また水辺に息する生き物たちに触れ、自然を学び、自然と戯れ幼少期を過ごしました。

まだ肌寒さを感じる早春でも、水の中へ入ることもあります。江津湖の水の温度は、年間を通して一定ですから、冷たくないのです。むしろ温かく感じ、何とも不思議な感覚になります。

五月末頃からは、夜になると蛍が飛び交います。熊本市内で蛍が見られるなんて、とても贅沢です。枕草子を書いた清少納言に想いを馳せませす。清少納言も私と同じように、ぼんやりと光って飛んでいく蛍を見て綺麗だなあと思っただと思うと、時代を超えても変わらぬ自然の奥深さを感じます。

秋には、湖周辺の木々の紅葉を楽しみ、風の音や虫の鳴く音に切なくなり、やがて訪れる冬に少しずつ近づいていることを感じます。湖には水遊びする小さな子供たちの姿は消え、代わりに、夏には聞こえなかった水のせせらぎの音が、しっかりと聞こえてきます。

そして冬。毎年江津湖に飛来する鳥たちが冬の到来を知らせてくれます。初冬の早朝には、湖面から立ち昇る蒸気霧が湖に浮かぶ鳥たちのシルエットを綺麗に引き立て、映画のワンシーンのようです。この現象は湖霧というそうで、強い冷え込みが起こると発生するそうです。水の国熊本を代表する江津湖の水は、加勢川に流れ、やがて緑川と合流して海

に流れていきます。

私の父は農業を営んでいます。米や、筑陽茄子という種類の茄子を何十年も作っています。農業で使用する水は、近くの加勢川から引いたり、地下から汲み上げています。加勢川の水を使うということは、江津湖の湧き水も含まれます。

「熊本の野菜は美味しいね。」

「こんなに美味しい野菜を食べられるなんて羨ましい。」

と県外の方に言われるたびに、当たり前前に食べてきた私は幸せ者だと実感します。水は作物を育てるのに、切っても切れない関係であることは言うまでもありませんが、その水にこそ、作物に命を宿してもらおう鍵だと私は思うのです。

きれいな江津湖を守る為、おいしい米や野菜を作ってもらおう為、私は小学生の頃からしている事がありません。それは江津湖周辺の清掃です。江津湖に行く時には必ずビニール袋を持って行き、帰りにはゴミや空き缶などを拾いながら帰ります。ゴミが多い日には、四十五リットルのポリ袋一杯になることがあります。たくさんゴミを見て、また綺麗になった江津湖を見て、少しでも自分なりに大好きな江津湖に恩返しができているのではと思うと、清々しい気持ちになります。更にはこの江津湖から湧き出る水が、ゆくゆくは私の家の田畑へと流れて、大地を潤して作物を育ててくれることを考えると、清掃せずにはいられないのです。清掃を続けることは、容易ではありませんが、続けていこうと思う気持ちをもち続けていくことが大切だと感じています。

今年もまた、田植えの時期がきました。代掻きされた水田を見ると江津湖を連想し、茄子や米も、子どもの様に愛情一杯に育てる父への感謝の気持ちが湧き上がってきます。今年も豊作であることを、心から願っています。

入選

水が織りなす自然と文化の継承

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 高司 萌恵

私たちが生活していく上で常に必要とする「水」。その存在は、命の次に大切な存在だと言つても過言ではない。しかし、私たちにとつての「水」とは、飲んだり、洗濯をしたりするなどの「生活用水」であり、実際に触れ合ったり、存在価値を考えたりする機会が少ないのではないかと思う。

小学生の頃、総合的な学習の時間に、郷土の川について研究したことがあった。その時、河川国道事務所のホームページを見て、私の住む延岡市が「水郷のべおか」と言われていることを初めて知った。五ヶ瀬川と大瀬川を中心に、街並みが形成された城下町であり、昔から豊かな水と自然に恵まれていたそう。とても驚嘆したのが、延岡に約百の水神様が祀られていたことだ。水に恵まれる一方で、水害も多かったため、先人達は川を神聖なもの扱いつつ、街を守ろうと知恵を出し合っていたらしい。その証拠に、「豊堤」と呼ばれる、日本で最初に作られた、アーチ状にできたコンクリートの隙間に畳を挟み洪水を防ぐ仕組みが貴重な文化として今も残っている。さらに調べてみると、今もお供えや神事が地域の人々や漁師によって行われ、水神様に水害防止や豊作を祈願していることが分かり、私も水神様の前を通ると、手を合わせるようになった。水神様がこの街をいつまでも長い目で見守ってくれていることで、大きな災害も起こらず、環境に恵まれた暮らしができていくのかもしれない。そう考えると、水神様や先人達に感謝しなければならぬと思つた。

昨年、私は学校の行事で、種子島へ研修に行き、見渡す限り緑でうめつくされた山の中でトレッキングをした。様々な植物が生存している自然あふれた山だったのだが、そこで口に含んだ軟水の味が今でも忘れられないほどにおいしかった。家で飲む水道水やペットボトルの水とは違

う。口に入ったとたんに、水自体は冷たいのだけれど、何かあたたかいものが伝わってきた。これが本当の水なのかもしれないと、初めて水の存在価値を思い知らされたような気分になった。人の手が加えられていない自然の中で生まれた水。これをこよなく愛した郷土の偉人がいる。私の母校である延岡小学校の大先輩、歌人の若山牧水だ。牧水という名前は、大好きだった母「マキ」と、ふるさとを潤す「水」に由来している。約九千首の歌の中で「水」という言葉が使われているものは約三百首ある。幼き日に、釣りを楽しんだふるさとを離れても、旅をしながらふるさとを懐かしんで歌を詠み、季節感を、流れる水にたとえて繊細な描写をしている。私は、牧水がいつも、水と親しみ、水を愛した証を歌から想像することができた。

私にとつての「水」とは、今までは「生きるため」のものだったが、水について様々なことを調べていくうちに、私たちは、歴史深き郷土で生まれ、愛され続けてきた水の存在の重みをもっと感じて、自然の恵みへ感謝するとともに、自然あふれる空間を体感していくべきだという思いが強くなった。水が簡単に手に入らない人々にとつては、「水」は「生きるため」だけのものなのかもしれないが、そのような人々も、水の起源や、それぞれの郷土での歴史を感じることができるよう心の余裕を持つてほしい。

今、私たちができることは、水の存在価値を再認識して、水をいつでも使うことが当たり前である生活に感謝し、大切に使うことだ。水神様が見ているから、無駄に使うことはできないだろう。これからも、自然の恩恵を体全体で感じて、感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたい。そして、私たちの次の世代にも、水の大切さを語り継いでいけるような大人へと成長していきたい。

入選

中学生の僕の小さな一歩

鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校 三年 松元 一真

胃の中に大量のプラスチックのキャップやその破片が詰まっている鳥の亡骸。ゴミと油で覆いつくされた海で水遊びをする子供。そんな鳥肌が立つような写真を初めて見たのは最近というわけではありません。地球規模で起きている水質汚濁という大きな問題は、メディアを通して様々な場面でよく耳にします。そんな中、中学生である僕たちはどう捉えなければいけないのでしょうか。

僕はバドミントン部に所属していて、試合は桜島で行われます。そのため、フェリーを利用するのは慣れたもの。行きは朝日、帰りは夕日に照らされる錦江湾を見るのが好きで、いつも友達と海風にあたりながら到着を待ち、笑顔満開で話をします。そんなある時、友達は海を見たままこう言ったのを強く覚えていました。

「錦江湾、いつもより少し汚れてないけ。」
どんなものかとよく見てみると、レジ袋やペットボトルがいくつ浮か浮いていました。それを見て、僕は苛立ちを覚ええました。

その数日後にニュースで日本の重油流出事故の特集をしていたのを見ました。人為的なミスにより、たびたび重油流出事故が起きていて、それは、日本の海で起きた事故もあれば、日本に運ぶための、タンカーが起こした事故もありました。その時、フェリーでのことを振り返り、水質汚濁の一番の原因は人間であるという結論にいたりました。海に浮いているゴミも油分も、僕たち人間の環境に対する考えの甘さが積み重なっていったものなんだと思います。

とは言え、僕は中学生です。大きなことはできません。そこで僕は、僕が使った水がきれいな水へ再び戻れるように、毎日少しずつできることを二つ考えました。一つめは、食後に残った汚れを、キッチンペーパーで拭ってから水に流すということです。途中で様々な浄化施設があるとは言え、水道と海がつながっていると考えると、影響が大きいと思っ

たからです。二つめは、シャンプーなどの使う量をできるだけ少なくするということです。海水と汚水が混ざるのをできるだけ防ぐためにそうしたいと思いました。そう決めた次の日、一日水質汚濁を防ぐことを考えた行動を試みることにしました。

朝起きてすぐ、顔を洗い、朝食をとります。みそ汁を残さずのみ、目玉焼きにかかっていたしように油がお皿に残ってしまいそうだったので、目玉焼きからめて、残らないようにしました。食べ終わった後のお皿は、キッチンペーパーで拭いて母に渡しました。母は驚いていたけど、理由を説明すると、

「偉いね。感心感心。」

と言ってくれました。その後、歯磨き粉の量にも気を配って歯磨きをして、学校へ向かいました。学校から帰ってきた僕は、お風呂に入り、シャンプーはできるだけ泡立てて少なめに使い、体はボディタオルを使い、工夫しました。夜ご飯も朝と同様にして、一日を終えました。普段は面倒臭がりの僕でも簡単にできた一工夫。今日の自分のがんばりで変わったことはあるかなと考えると、少しにやけてしまいました。そして、これならば継続可能だと思ひ、翌日からもずっと続けていきます。

僕たちは、水質汚濁が進み、きれいで安全な水が少なくなっているのを知っています。しかしそれを知った上で行動に移した人は、きつとほんのわずかです。僕たちは、未来のことを考えて真面目に捉えることが苦手ですが、絶対にやらないといけないことです。

先日、一枚の美しい写真を見ました。海から力強く大きな円を描く虹の写真です。鮮やかで幻想的なその虹のように、今は汚れている水でも輝く時がきつとくる。僕たちは、水の輝きを失わぬために自分が流す水に責任をもたねばなりません。僕たちが使う水は、世界中とつながっているのだから。

入選

水と共に生きる

「水は大切」この言葉は家庭や学校で一度は聞いたことがあるでしょう。幼い頃の私はこのようなことを耳にしても、正直あまり関心を寄せることはありませんでした。そんな私が水について強い関心を持つようになったのは中学生になってからです。

私の通っている中学校では、総合的な学習の一環で、農園活動を行っています。そしてその農園で使用している水は、近くの「東山ファームポンド」から供給されています。ファームポンドとは、地下ダムから汲み上げられた水を一時的に貯水し、その水を畑に散水する農業用施設のことです。私たちは年に一度、東山ファームポンドを訪れ、見学、清掃活動を行っており、宮古島の農業はこのファームポンドによって成り立っていることをそこで初めて知りました。また、ファームポンドの貯水量は小中学校プール(350³m)の約88杯分に相当するということも教えて頂き、そんなに多くの水が、身の周りの農地で利用されていることに驚きを隠せませんでした。そして、同時に「水」の存在が私の中でとても大きなものになっていきました。

私の住んでいる宮古島では、青々としたさとうきび畑が辺り一面に広がっています。そんな中にある私たちの学校では、農園活動で収穫した農作物を地域の方々に販売しています。収穫の喜びで笑顔あふれる生徒たち、無人販売の棚に所狭しと並ぶ立派な野菜たち、そしてそれを手にとってくれる地域の方々の温かい眼差し。どれも私の大好きな光景です。そして、その光景が作り出されるのも、全ては「水」のおかげであることに気づいてからは、「水」への感謝の思いでいっぱいになりました。

このように、「水」への関心が高まってきた私の耳に衝撃的なニュースが入ってきました。テレビから流れてきたそのニュースは私が住む宮古島の隣の島、伊良部島で起こった「断水」です。予想を上回る観

沖縄県 砂川中学校 三年 池間 暖

光客の増加により、需要に供給が追いつかず、長期に渡り断水せざるをえない状況になったということでした。テレビに映る島民の方々は、皆不安げで困っているような表情でした。観光客の増加で供給が追いつかないということは、私たちにとっても他人事ではなく、いつ、同じような状況になるかもしれないという不安に襲われました。

「もし、この世から水が無くなったらどうなるのだろう」私はこのとき、初めてそんな疑問が浮かびました。「水は大切」という意識はあっても、「水は有限である」ということまで考えが及ばなかったのです。また、それはとても想像したくないことでした。私にとって「水」の存在は当たり前で、「水」のない世界が見えなかったのです。

世界には、多くの発展途上国があります。そのことはもちろん知っていました。が、「水」という視点で考えると、そこには、「水」の存在を当たり前だと思っている人はおらず、命をつなぐ一滴の水を手に入れるために、大変な苦勞をしている人達が大勢いることは簡単に予想できます。しかし、先進国で育ち、生活する人々の中には水のありがたさに気づかない人も多くいます。私は、そんな人達に伝えていきたいです。今、水と共に生きている喜びを。

当たり前だけど、実生活と結びつけないと気づきにくい、水の存在の大きさと、「水は大切」という言葉の重み。次世代を担う私たちだからこそ、できることがあります。まずは「水に感謝すること」そして、「水を大事にすること」私は、これらを日本中、そして世界中に発信していくひとりでありたいです。

入選

水を大切に知る知恵に学ぶ

沖縄県 栗国中学校 三年 宮里 怜奈

私達が生きていくうえで水はとても大切なものです。

私の住む栗国島の昔の人々は、その水を得るために「トウージ」という水を溜めておく入れ物を作りました。私の学校にもトウージが残されていますが、私は毎日なんとなくトウージを見て通り過ぎていただけでした。そのトウージには、昔の人々の知恵や苦労が詰まっていて、貴重な島の遺産であることも知りませんでした。

栗国島は沖縄本島から北西に約60Km離れた小さな島です。平坦な土地で森や川もなく、昔は水を得るのがとても難しかったそうです。そういう生活の中で、島の人たちは水を溜めるために島で採取できる石を彫って「トウージ」を作り出しました。

トウージは、村の集落から遠く離れた海岸にある凝灰岩という岩をくり抜いて作りました。当時は機械などの動力になるものもなく数千人で交代しながら運んだそうです。どれほど巨大な石だったのでしょうか。その人数の多さから、この仕事が大変な作業であったことが伝わってきます。昔の人々は、このような苦労をして水を得ていたのです。

「昔はどんな風に水を使っていたの？」
祖母に聞きました。

「昔は水道がなかったから、井戸の水をくんで飲み水や料理に使っていたんだよ。」

「洗濯は、ため池まで歩いて行って、その水で洗濯をしていたんだよ。」

今の生活からは、比べものにならないほど大変な生活だったと、祖母は語ってくれました。

「お風呂はどうしてたの？」

「毎日冷たいため池の水で体を洗っていた。週に一回ぐらいしか自分たちが沸かしたお湯には入れなかった……。」

ため池などは遠い場所にあったので、洗濯物を抱えてそこまで行くにも一苦労だったそうです。そのため雨水を溜めて使うことは貴重な水資源を確保するために必要なことでした。昔の人々は、このような大変な思いをして水を得ていたんだと思うと水は大切にしなければならぬと思います。祖母の話聞いて、昔と今では、全然水事情が違っていたことを知り、祖母が水を無駄使いたくない理由も分かりました。

現在、私達は、水で困ったという経験をしたことがありません。祖母が苦労した頃と比べると、とても便利な生活をしています。水が快適に使える生活環境の中で過ごしている私にとって祖母から聞いた話は、当たり前にあるものだと思っていた「水」に対する意識を変えるきっかけになりました。たくさん人の技術と知恵と協力があつたから、今、私達は水を飲んだり、利用したりして便利に生活できていることも理解できるようになってきました。近年は、海の水が汚れてきていて、海の生き物にも変化が表れていると言われています。このまま、海の汚染が進んでいけば、私たち栗国島の水も危機的な状況に陥るかもしれません。なぜなら、私たちが飲んでいる水は、海水を淡水に変える設備によって、得られているからです。そう考えると、水は小さな栗国島だけの問題ではなく、地球規模の問題であることに気づかされます。地球の自然環境を守っていかねければ、世界中の「水」問題で困っている人々の課題解決にはならないのです。

栗国で飲んでいる水は、海水の恵みによって得られています。また、現在の私たちの水環境は、多くの方々の知恵と技術とまごころが積み上げられて、成り立ってきたものです。感謝の心を忘れず、この栗国島の「トウージづくり」の時代にあつた協力し、支え合いながら水を確保していた先人たちの知恵に学ぶことが、「水」を大切にすることを受け継いでいくことになるのだと思います。

入選

水のイメージ

インドネシア共和国

ジャカルタ日本人学校

三年

保泉 まどか

「水色」という言葉がある。文字の通り、「水のような色」という意味だ。私達日本人にはとても馴染み深い言葉だと思う。私も幼い頃から何の違和感もなく使っていた。しかし世界では、日本という「水色」を「水」を使って表現している国がなかった。日本に住んでいた時には分からなかった理由が、最近発展途上国に引っ越してきて「水質汚濁」が水のイメージを変えてしまったのが原因ではないかと考え始めた。

そう考え始めたきっかけはインドネシアの町中を訪れた時だ。いつもは郊外にある日本人が多い都市に住んでいてなかなか町中に来る機会がないので窓にはりつくようにして外を見ていた。その時、なにやら濁った茶色っぽい固まりを遠くに見つけた。最初は原っぱかなと思っていたがよく目を凝らして見てみるとそれは川だった。私は衝撃をうけた。テレビや新聞で水質汚濁のことは見てある程度は分かっていたつもりだったが、思っていたよりも汚くてショックだった。また、その後も見つけていると町の人達は水が匂うのか、鼻をつまんでいたりマスクをして川の前を通っていた。もしかしたら、ここに住む人達にとって水というのは「なければいけないが、臭くてとても厄介なもの」になっているのかもしれない。日本とはまるで違った水への印象は私にとっても大きな衝撃をあたらえた。

「水色」が世界共通語でない理由、それはやはり「水」を想像しても汚い茶色っぽい色がすぐに頭にうかんでくるほど汚染された水の近くに住んでいる人が多くいるからだろう。国を発展させることはもちろん必要だ。しかし発展させることによって私達人間を支えてくれた「自然」に被害がでるようなら元も子もないと思う。世界中が一つのチームとなって、環境に配慮しながらこの地球というかけがえのない星を輝かせられるように今日からは私達が頑張りたい。

世界中の人々が「水色」と聞いて同じ色を想像できる。その時が地球

が少し輝いた証なのだと思う。

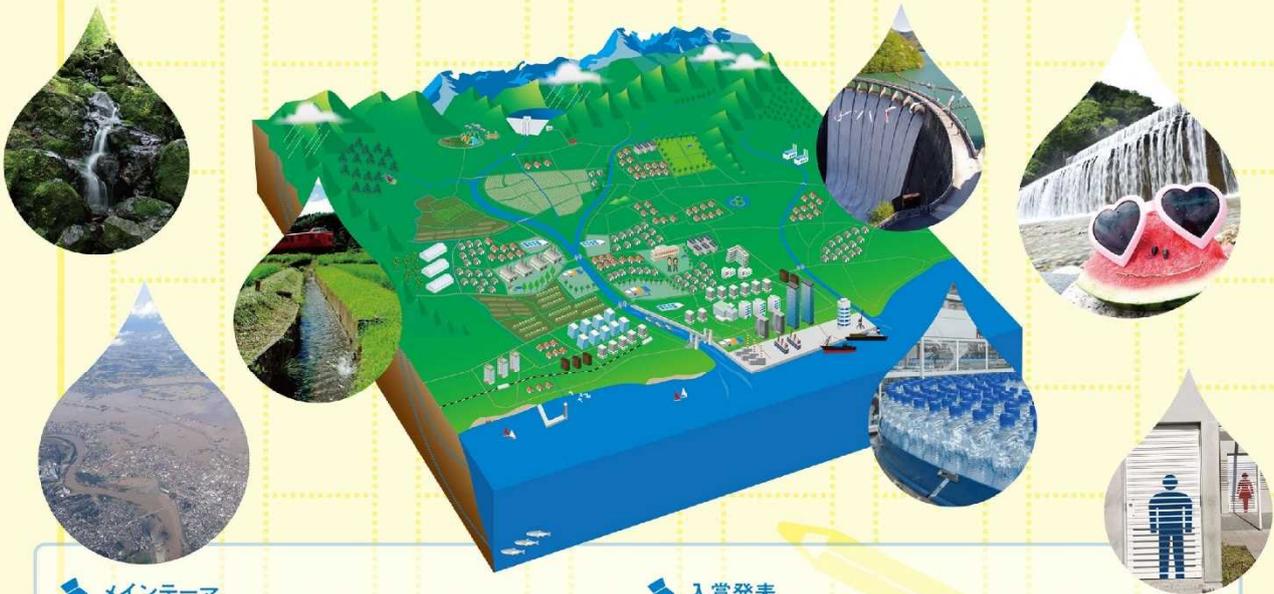
第40回
全日本
中学生

水の作文コンクール

水について考えよう！

“水の惑星”と呼ばれる地球。でもその水は、無限ではありません。海から蒸発して雲になり、雨や雪となって地上に降り、川から再び海へと循環しているのです。地球上をめぐる限られた水を、人々は身近な生活のほか、農業や工業など多くの場面で便利に使っています。

その一方で、ときには洪水や水不足の被害に見舞われることもあります。水の恵みを利用し、災害を防ぐために、はるか昔から現在まで、人々はさまざまな努力をしてきました。水とのつきあい方の工夫は、町のいたる所で目に見ることができます。あなたにとって、水とはどんなものですか？ 暮らしのなかでの体験や、授業で学んだことや調べたことをもとに、水についての考えを作文にまとめてみましょう。



メインテーマ

水について考える(個別の題名は自由)

原稿(記載要領)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記

応募締め切り日

【国内】各都道府県の水資源担当部局にお問い合わせください
【海外】平成30年5月18日(金)

提出先(問い合わせ先)

国土交通省水管理・国土保全局
水資源部水資源政策課
〒100-8918東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

入賞発表

平成30年7月中旬頃

表彰(予定)

○内閣総理大臣賞(最優秀賞).....	1編
○厚生労働大臣賞(優秀賞).....	1編
○農林水産大臣賞(優秀賞).....	1編
○経済産業大臣賞(優秀賞).....	1編
○国土交通大臣賞(優秀賞).....	1編
○環境大臣賞(優秀賞).....	1編
○水の週間実行委員会会長賞(優秀賞).....	1編
○(独)水資源機構理事長賞(優秀賞).....	1編
○全日本中学校長会会長賞(優秀賞).....	1編
○全日本中学生水の作文コンクール 中央審査会特別賞(優秀賞)(必要に応じて)	1編
○入選.....	30編程度
○佳作.....	150編程度

※最優秀賞及び優秀賞の受賞者を8月上旬に表彰式に招待し、賞状等を授与します。
第39回は全国から16,725編が寄せられました。

主催 水循環政策本部、国土交通省、都道府県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

8月1日は「水の日」、8月1日～7日は「水の週間」です。

※詳しくは「水の日・水の週間」ホームページ
(<http://www.mizunohi.jp>)をご覧ください。

水の日

検索



第40回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（平成30年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と
同じ学齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する
者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・平成30年6月1日（金）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて
到着分有効
 - ⑥ 著作権等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査 応募作品14,151編のうち、各都道府県の地方審査を経た172編及び海外日本人学校より送付された
11編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる41編を選出。
平成30年7月5日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞8編及び入選32編
あわせて41編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	全日本中学校長会会長賞 水の週間実行委員会会長賞 独立行政法人水資源機構理事長賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成30年8月1日（水）にイイノホール
にて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

枝村 晶子（全日本中学校長会編集部部長）
小川 祥直（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（経済産業省地域産業基盤整備課長）
是澤 裕二（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（厚生労働省水道課長）
坂本 修（内閣官房水循環政策本部事務局審議官）（国土交通省大臣官房審議官）
須磨 佳津江（キャスター）
玉野井 晃（公益社団法人日本水道協会調査部長）
富岡 誠司（独立行政法人水資源機構理事）
長崎 宏子（スポーツコンサルタント）
宮崎 敏行（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（農林水産省水資源課長）
渡邊 康正（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（環境省水環境課長）

5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、
全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第40回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	いしだ はるか 石田 明佳	たけした みゆう 竹下 心結	ふじわら ももほ 藤原 百葉	-	-
2	青森県	おおさわ つぐみ 大澤 緒珠	すずき ふう 鈴木 楓生	こさか たかよし 小坂 高義	かんの ひなこ 菅野 日菜子	たなか あすか 田中 明日香
3	岩手県	ふじひら ゆい 藤平 優衣	ちば ゆら 千葉 侑来樂	きたしま かの 北島 奏音	すがわら なほ 菅原 菜央	かめおか りな 亀岡 莉名
4	宮城県	いざき えり 井崎 英里	わたなべ まさみ 渡辺 長真	さきき あやせ 佐々木 彩晴	-	-
5	秋田県	ひもり ゆみき 檜森 優弥輝	-	-	-	-
6	山形県	-	-	-	-	-
7	福島県	いまむら まお 今村 真生	かとう あゆ 加藤 杏優	たかの いぶき 高野 伊吹	にへい さえ 二瓶 紗英	まるやま なな 丸山 奈々
8	茨城県	ひろせ とわこ 廣瀬 十和子	うみの りう 海野 凜生	かじはら じゅん 梶原 純	はぎのや みつき 萩野谷 光姫	おの そら 小野 颯来
9	栃木県	えびぬま みか 海老沼 美花	はこだ びゆり 箱田 緋優璃	かわさき ももえ 川崎 桃枝	おおつか りの 大塚 莉乃	けんもく りりか けんもく 莉里佳
10	群馬県	あさかい みか 浅海 美加	わた のか 和田 菜花	しみず 快 清水 快	あおき ほのか 青木 穂乃佳	あかがわ ことね 赤川 琴音
11	埼玉県	すずき あみ 鈴木 彩心	まつざわ み佑 松澤 美佑	おおさわ もえ 大澤 百恵	かわしま じゅんた 川嶋 純太	すなかわ ゆみこ 砂川 友美子
12	千葉県	いませき さき 今関 沙樹	いながき りり 稲垣 りり	こいけ ゆうな 小池 優奈	はなしま はな 花島 葉菜	おちあい ゆみ 落合 由美
13	東京都	はら ななか 原 奈々佳	しば崎 あやか 柴崎 彩香	いけだ まりこ 池田 麻里子	ほりはた えりか 堀端 恵莉花	ニヨンサバ じゅん サンゴボネ 順
14	神奈川県	さとう みすず 佐藤 美鈴	かどわき ゆきこ 門脇 宥祈子	とやま はな 外山 華	ほんだ みなみ 本多 みなみ	やまだ みな 山田 美花
15	新潟県	こんどう たかみ 近藤 匠	さかま こうしろう 坂牧 耕史朗	おおた 那生 大淵 那生	あさい ふつき 浅井 楓月	さかい まな さい 真菜華
16	富山県	あさひ ななこ 朝日 菜々子	さの あおと 佐野 碧音	なかの ゆき 中野 友貴	-	-
17	石川県	-	-	-	-	-
18	福井県	-	-	-	-	-
19	山梨県	うえの さくら 上野 桜	いけだ あゆむ 池田 歩夢	やまざき あゆみ 山崎 絢美	ひろせ ゆい 廣瀬 結	ふるや りな 古谷 梨那
20	長野県	-	-	-	-	-
21	岐阜県	まつなみ ゆい 松並 佑衣	みかみ まひろ 三上 万尋	ながた みゆ 永田 美優	よしだ ゆき 吉田 有希	しまかげ せいな 島影 聖菜
22	静岡県	すずき さちよ 鈴木 幸世	いしかわ しょうたろう 石川 晃太郎	いしがわ しのぶ 池上 詩乃	てらかど りんね 寺門 鈴音	きむら かな 木村 花菜
23	愛知県	あさい かほ 浅井 郁帆	いわた あやみ 岩田 彩美	かわせ ともみ 川瀬 幸実	まの そうま 真野 聡真	わたなべ ふるか 渡辺 風花
24	三重県	すぎやま なつみ 杉山 なつみ	はやし たいき 林 汰樹	かめや のえる 亀谷 柊瑠	まえだ あずみ 前田 あずみ	こんどう ともか 近藤 智郁
25	滋賀県	しまの つばさ 佐野 翼	しまだ いたる 嶋田 格	あかざき まこ 岡崎 真心	-	-
26	京都府	まえだ あおい 前田 葵	いちい みさき 一井 美咲	いしだ しおり 位田 汐里	おだ さきこ 小田 早希子	-
27	大阪府	やの ななみ 矢野 七海	なかしま もえ 中嶋 もえ	しまばやし たくみ 嶋巴 拓未	ばん ゆりこ 伴 百合子	おおしも ゆうか 大霜 優花
28	兵庫県	あさみ みひろ 浅見 美裕	すずき みなほ 鈴木 南帆	せき かほ 関 風帆	あもう ゆづき 天羽 悠月	もりぐち なつみ 森口 夏海
29	奈良県	ふしお なつき 藤尾 夏妃	きたがき なお 北碕 奈王	うえだ なお 植田 奈央	ほりのうち なな 堀之内 菜七	とおいき すずか 遠木 鈴華
30	和歌山県	かみたに みなみ 上谷 南美	こたに こうし 小谷 高司	こにし ゆうと 小西 優斗	-	-
31	鳥取県	-	-	-	-	-
32	島根県	-	-	-	-	-
33	岡山県	い나다 ち はる 稲田 知陽	-	-	-	-
34	広島県	かとう まさき 加藤 正己	たにぐち ななこ 谷口 菜々子	もり あゆか 森 歩華	-	-
35	山口県	さえき ななこ 佐伯 菜々子	そらくぼ みわ 空久保 美羽	たむら けんたろう 田村 健太郎	-	-
36	徳島県	なかにし みづき 中西 美月	まつお つばさ 松尾 つばさ	こんどう ひなの 近藤 妃奈乃	でぐち りこ 出口 莉子	なかい もえ 中井 萌絵
37	香川県	ながの たくみ 長尾 拓実	きのした いろは 木下 彩羽	-	-	-
38	愛媛県	もり はると 森 温大	ありま ちか 有馬 千加	いのうえ ともか 井上 朋香	ひらおか みずき 平岡 瑞季	まつい のぞむ 松井 望
39	高知県	-	-	-	-	-
40	福岡県	うの ゆりこ 宇野 由里子	おか まさき 岡 茉咲	たにはた はるか 谷端 遙香	かわはら みさ 川原 三沙	いしまつ はやと 石松 隼
41	佐賀県	おおた まりん 太田 真鈴	さわい えな 澤山 笑菜	おかもと はる 岡本 陽	いしい こうだい 石井 皓大	はしの みき 橋野 未樹
42	長崎県	やまわき まどか 山脇 円佳	えんのうし はるか 円能寺 遥	もり さくら 森 咲良	まちだ あみ 町田 愛海	すずき 彩の 須崎 彩乃
43	熊本県	きたむら あきほ 北村 愛希穂	かつた りゅう 勝田 涼	ひろおか りな 廣岡 里奈	おおつか れおね 大塚 麗徳音	はしもと さき 橋本 咲喜
44	大分県	ほしの りんか 星野 倫花	ひじや たいち 泥谷 泰地	くどう のか 工藤 野々花	-	-
45	宮崎県	たかむら もえ 高村 萌恵	なかむら そうご 中村 颯牙	おかわた あや 柏田 彩乃	おだぎり きょうこ 小田切 馨子	おおた たける 大仁田 健
46	鹿児島県	まつぼ 幸来 松久保 幸来	まつもと かずま まつもと 一真	わだ 乙葉 和田 乙葉	せき ゆきの 関 祐紀乃	うすき さやか 宇宿 清花
47	沖縄県	いけま のん 池間 暖	なかそね みい 仲宗根 美唯菜	みやもと れいな 宮里 怜奈	はねじ げんき 羽路 元喜	きんじょう しおり 金城 汐里
48	海外	ほいずみ まどか 保泉 まどか	-	-	-	-

(注)氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第40回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	3	10	329	22	194	113
青森県	5	4	258	0	97	161
岩手県	5	9	19	1	14	4
宮城県	3	4	9	3	1	5
秋田県	1	1	1	1	0	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	5	12	538	138	214	186
茨城県	5	6	428	111	264	53
栃木県	5	5	375	64	195	116
群馬県	5	8	475	26	211	238
埼玉県	5	10	443	177	141	125
千葉県	5	13	412	4	320	88
東京都	5	9	670	214	354	102
神奈川県	5	9	1,252	327	279	646
新潟県	5	6	75	13	46	16
富山県	3	6	412	70	187	155
石川県	0	0	0	0	0	0
福井県	0	0	0	0	0	0
山梨県	5	5	30	7	13	10
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	6	61	2	26	33
静岡県	5	6	422	288	82	52
愛知県	5	9	184	58	98	28
三重県	5	4	466	222	239	5
滋賀県	3	11	418	245	81	92
京都府	4	11	563	174	188	201
大阪府	5	6	304	188	68	48
兵庫県	5	6	695	112	326	257
奈良県	5	6	99	24	34	41
和歌山県	3	10	812	469	279	64
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	0	0	0	0	0	0
岡山県	1	1	1	0	0	1
広島県	3	3	626	234	209	183
山口県	3	1	10	5	3	2
徳島県	5	3	43	1	6	36
香川県	2	22	106	0	56	50
愛媛県	5	12	72	2	60	10
高知県	0	1	2	0	0	2
福岡県	5	7	360	0	145	215
佐賀県	5	21	456	196	260	0
長崎県	5	3	211	55	88	68
熊本県	5	21	1,847	464	756	627
大分県	3	1	83	32	23	28
宮崎県	5	6	347	152	86	109
鹿児島県	5	8	176	75	84	17
沖縄県	5	10	50	5	19	26
海外	1	2	11	1	4	6
合計	173	314	14,151	4,182	5,750	4,219

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
合計		18,172	517,337			178,092	185,319	153,723

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名、
 第37回においては学年未記入者6名を学年別集計から除いている。

第40回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品14,151編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞8編の受賞者の表彰式は、平成30年8月1日（水）に東京都千代田区のイイノホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



最優秀作文の朗読

宮城県 宮城県仙台二華中学校3年 井崎 英里さん（内閣総理大臣賞受賞者）



作文コンクール受賞者と各賞授与者



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>